
大きな銃に小さな手

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな銃に小さな手

【Nコード】

N6906Y

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

近年、裏社会で最も恐れられた殺し屋。片手にマグナムと、黒いコートがその特徴とされる『カフィン』が、突如姿を消した。彼が消えた後、最強の席を一人の少女が埋める事になる。この少女は、一体……？

懺悔という名の自己満足

ごめんなさい。　ボク、悪い事をしました。
何って、簡単だよ。　ボクが君に、悪戯をした。
壊しちゃった。　捻じ曲げちゃった。

その頭は飾りか。　ボクの頭はただの飾りだ。
君の頭もただの飾りだ。　ボクから見れば。

頭どころか、ボクに身体は飾りでしかない。

君が大好きになったから、ボクに合わせて君を変えた。
さて、君の身体はどうなったのでしょうか？

朝起きたら。　事故に遭って。　気を失って。
いつの間にか。　知らないうちに。　気付かない内に。
君はボクの都合で、作り変えられたんだよ。
風を流れる。　小さく弱い悪魔の手にかかってね。

『君は、何も知らないお姫様になったんだ。　ボクの気まぐれに
当てられて』

懺悔という名の自己満足（後書き）

ぶっちゃけ、第三部辺りまでは暗いだけで面白みが無いかもしれないです。

ついでに言うと、私はこういう系の話は苦手です。これで練習何だか、三章越えたあたりからやっぱりファンタジーが混ざる傾向にあるみたいです

ぼやきと言つ名の自己満足（前書き）

この自己満足文は縦書き読向けに書かれています
横書きなので若干読みにくいです

ばやきと言つ名の自己満足

「ブルーノの額に弾丸を撃ち込め」

依頼主は、確かにそう言った。本日のターゲットは、ブルーノと呼ばれる金髪の男。写真の通りの奴に弾丸をねじ込めば、俺の任務は完了だ。

彼はその気に入っているコートに身を包み、事務所の外に止めてあったバイクにまたがった。闇にその黒髪を馴染ませ、その青い瞳は闇に浮かぶ猫の瞳の如く。異様な雰囲気放っている。

キーを捻り、エンジンを掛けると同時。音も無く、彼は闇の中へと姿を消した。

月明かりの下で、素早く動き回る小さな影。それは、ビルの屋上から見ている所為かもしれない。

時折、火花を撒き散らすその黒いコートの男は、次々に警備員達をなぎ倒すとビルの中へと侵入した。傷など、一切負うことなく。まるで余裕の表情を崩しそうに無い。ただ、この表情は彼が明日起きた時には消えているだろう。ボクの手によって。

「中々、強いんだ」

ビル風によって吼えるような音が響く。ビルの屋上のアンテナから逆さにぶら下がる彼女は、楽しげに小さく呟いた。

「侵入者だ、銃を持ってるぞ！」

彼の侵入した一階では、大騒動が起きていた。いまこのビルの中では、とある兵器製造業者のパーティーが行われている。それを聞けば、恐らくは誰もが『兵器製造業者の主要人物を殺しに来たに違いない』と、思うことだろう。

全く持って、その通りだった。

彼は歩みを一切止めることなく、それどころかその直進を維持したまま。的確に敵の急所にその弾丸を次々と撃ち込んでいく。

彼の通った後には硝煙の、死の匂いが残されている。

使っている銃は、至って普通。

特注品ですらないだろう。ただの、マグナム。それも、型にはめられて量産されている。身分証名称を持って銃器を扱う店へ買いに行けば誰もが購入可能であろう代物だった。

「俺は、お前らの頭……ブルーノに用がある。死にたくなけりや、道を明ける」

彼の一言は、とても青年とは思えないものだった。

逆らえば、殺される。そんな死神のような一言は、聞いた者の戦意を瞬く間に消し去った。並の人間に、太刀打ちできるような相手ではない。

銃を取り上げたとしたら？ いや、無理だ。奴はまだ武器を持っている。

それから、たった十分間の出来事だった。彼は標的の居るフロアに到達し、その銃の引き金に指を掛ける。標的の横に居るボディガードも成す術は無く、ただ見守るだけだった。

「見つけたぜ、ブルーノさんよオ。面倒臭かったぞ、雑魚の相手は」

その銃口の先には、金髪の男が。無念といった様子で、立ちすくんでいた。

「貴様……カフィンか!？」

その男の口から、そんな言葉が吐き出される。

「ああ、俺はそう名乗った覚えは無いが。そう呼ばれている。……俺も、使われる人間なんだ、悪く思っなよ」

爆竹のような爆発音が、そのテーブルに並んだワイングラスを貫

き、砕く。

銃口から吐き出される小さな衝撃波に、彼の黒髪が揺れる。青い瞳は、瞬きをすることなく。その弾丸が、ブルーノの額にめり込む所まで。そして、紅い液体を吐き出す所まで。ハッキリと、その瞳で確認する。

「さて、任務官完了か。……そのゴリラ」

ため息をつく、カフィンがボディガードの一人に札束を投げ渡した。相当な額らしく、啞然とするほか無い。どういう、意図で……？

「これは……？」

「仕事ご苦労さん、依頼主が死んだら報酬が無いだろ？ 大人しくしてた礼だ、俺が払ってやる。それと、早い所その馬鹿ブルーノを持って帰ったほうがいいぜ？ 俺は依頼で“ブルーノの額に弾丸を撃ち込め”と言われて来てるんだ、何て弾だろうがその辺は俺の自由。

さて、俺は早い所、警察が来る前に撤退させてもらうぜ」

それだけ言い残すと、彼は窓ガラスを突き破り、闇の中へと姿を消した。

ぼやきと言つ名の自己満足（後書き）

ブルーノ・デイヴィー

性別 男

職業 兵器製造会社の社長にして、兵器の密売人

侵入者という名の自己満足

行きと同様、彼はバイクで帰宅した。音の出ないよう加工しているらしく、電気エンジンにサイレンサーをつけたような。黒いボディであるのも相まって、それは闇の中では不可視にも近いステルス性能を発揮していた。

だが、そんな小さなことは、彼のオプションでしかない。

彼の真骨頂はその圧倒的な強さと技能にあり、ステルスバイクなどは面倒ごとを避ける無駄な小細工でしかなかった。

キーを引き抜き、事務所の敷地に入れる。事務所の鍵を取り出すと、彼は面倒くさそうに顔をしかめた。取り出した鍵は、直径五センチ程度のリングにざっと十個以上。そして、扉に設けられた鍵穴はそれの二倍。二十個。

そして、この鍵穴は単純に一つの鍵で二つの鍵をあけるのではない。ランダムに、一つの鍵で最低一つの鍵穴を開ける。その組み合わせは“千四十序通りせんよんじゅうしよ以上”が存在する計算になるわけだが。

実際、鍵の形状の問題で十の十乗、百億通りがいいところなのが、それが二つあるわけで。現実的な数字は、二百億通りの開け方を試さなければ、この扉は鍵を持っていても開けない。

鍵と鍵穴の組み合わせを忘れれば、恐らく。誰にも空けられない開かずの扉になるだろう。

そして、その組み合わせはカフィンしか知らない。もし、扉を爆破して侵入しようものなら炎熱反応で作動する機関銃の餌食である。

その面倒くさい鍵をあけ終わると、彼はその瞳を凝らし、

「誰だ、何処から入った？」

闇の中に居る“何か”に対し、問いかける。傘立に、見たこともないような白い傘が刺さっている。

そして、もう一つ。“何か”がいるという情報を、匂いが伝え

ている。淹れたばかりのコーヒーの匂いと、もう一つ。揺り椅子の椅子のきしむような音。

……何者だ？ 開錠して入ったか……？ いや、あれを外すには相当時間が掛かる。それこそ、今しがた外出した一時間弱の時間だけで開ける事はまず無理だ。

何だ？ 『幹部』の……指令伝達であれば有り得ない事ではないが、俺に顔を合わせる決まりがある。闇に紛れていれば、俺が撃ち殺すという行為に出ても良い決まりだ。なのに、その危険を冒すのか？

そこまで考えれば、『幹部』とは関係ない部外者が、この事務所に不法侵入したと考えるのが最も理由としては辻褄が合う。

「三秒だけくれてやる、居れば居ると言え」

静かに、腰に挿していたマグナムを手に握った。

「三」

安全装置を外し、撃鉄を引く。

「二」

気配の元に、銃を向けた。

「一」

「ゼロ？ 居るよ、居る居る。チョット待って、暗くて見えなくってさ」

高い、女の声。そして、闇の中を慌しく歩き回ると、どういうわけかその女は壁を叩き始めた。一体、何をやっている？

二秒ほど叩き続け、突然。事務所の電気が点いた。

どうやら、スイッチを探していただけらしい。

「いやー、久しぶりだね。アレン」

明かりがついた中に立っていたのは、金髪の少女。どうしてだ？

「何で、俺の名前を知ってた？ ……何処の人間だ？」

アレンの言葉に、彼女は特に怖がる様子も無くテーブルにおいてあった写真立を手に取った。アレンの、幼い頃の写真。孤児院の仲間と、一緒に映っている。

目の前の彼女と同じ、白いコートの女の子。……誰だ？

「まさか、ユリアか？ ……よくここが分かったな、どうやって調べた？」

アレンは驚いたようにユリアと呼んだ少女に向けていた攻撃的な視線を引つ込めた。久々の、客。

それも、自分と同じ人間が来ることなど滅多にない。

殺し屋でも少し、嬉しかったりする。

「いや、ボクはアレンを探してたわけじゃ……無いって言えば嘘になるかな。ボクさ、君と同じで殺し屋……やってるんだけど……」

……

楽しげだった彼女の表情が、一気に曇る。どうやら、個々に来た原因を話したくは無いらしい。だが、話してもらわなければこつちも状況の把握が出来ない。

「どうした？ 俺を殺せて依頼でも受けたか？」

アレンは冗談混じりにユリアに問いかける。だが、ユリアからの返事は無い。

むしろ、冗談を言う前といった後で、明らかに。ユリアの表情は曇っていた。

「……そうなんだ。ボク、君を殺せて依頼を受けたんだよ」

「んあ？ マジだったか、そうか。んあッハッハ！ 大丈夫だ、殺そうとしても返り討ちにしてやる」

アレンは楽しげに笑うと、ユリアの表情が少し楽になったような気がした。

そのまま、アレンは言葉を続けた。

「構わないぜ？ 俺は、誰にも殺されねえ。……お前も、殺すつもりはねえよ」

そんな言葉と同時だった。……殺人鬼という生き物は、敵であればどんな人間に対してであれ。非情になれるものだ。

手に握ったままだったマグナムの銃口を、一瞬の内にユリアの胸元に向けたかと思うと、発砲。赤い液体が飛び散り、ユリアの身

体は仰向けに倒れた。

「……な、殺しちゃいねえだろ？　少し痛かったかも知れねえけどよ、俺は人を殺すつもりはねえよ」

アレンの言葉の直後、ユリアは驚いた様子で起き上がった。

ユリアの胸元を紅く染めるそれは、油性マーカーのような匂いにする。ペンキではないようだ……ペイント弾？

「今日の依頼も、そうだ。結構強い麻酔仕込んでるが、殺傷力は殆どゼロだ。痛かったらごめんな」

「いつも、こうやって誤魔化してきたの？」

ユリアの問いに、アレンは楽しげに頷いた。アレンが頭を上げると同時、ユリアは目の前で。アレンの胸元に銃口を突きつけていた。

アレンの銃は、アレンの手に。つまり、この銃はユリアのもの。

「悪く思わないでね、少し痛いだけだから。仕返したよ」

発砲音。そして、銃口から立ち上る煙。確かに、死にはしないが少し痛い。

「……なんだよ、お前も……れ？　ずいぶん……強い麻酔……だ

……な……」

その言葉が終わる前に、アレンはうつ伏せに床に倒れた。

「あれ？　……実弾と間違えたかな？」

侵入者という名の自己満足（後書き）

序は数字の位

京の二つ上の位に当たる

性転換という名の自己満足

夜中、突如アレンは目を覚ました。それは、シャワールームから聞こえてくる水の音が原因というわけではない。

寝かされていたソファ横の机に『シャワー借りてるよ』という書き置きがある辺り、どうやらユリアの訪問は夢オチというわけではなさそうだ。メモを抑えていた自分の銃を引き出しにしようと頭を抱え、ソファにもう一度倒れこんだ。

床に倒れたと思ったが……よく持ち上げられたな。まあ、俺にそこまで物凄い体重があるわけではないが。むしろ、軽いくらいか？

にしても、即効性ってだけで結構弱い薬だったか？

「う……気分わりい」

思わず、そんな言葉がアレンの口から漏れる。

何だ、気分が悪い。酒を飲んで酔ったような……酒なんて飲んでねえぞ？

そんなことを考えている間にも、気分の悪さから発展したのか。頭痛がアレンを襲う。が、頭を抱えることしか出来ない。そうしている間にも、痛みは頭どころか、腹部を中心に。全身が烧けるような痛みが彼を襲う。

「マジで……どんな薬仕込んでたんだよ……」

損な小さな吐き出すような言葉とともに。アレンは一瞬痙攣したかと思うと、気を失った。

「うー……」

気がつけば、どうやら痛みは引いたらしい。全く、どんな強烈な麻酔しこんでたんだ？ ああ、あの弾丸。

ソファから起き上がると、視界に違和感を感じる。そして、顔の横から降ってきた黒い。長い髪の毛。

これは……一体？

「あ、目が覚めた？」

アレンに押し掛かり、ユリアが笑顔で拳銃を向けている。

「うわあああああ！？」

……まったく、事務所の中で銃向けるの止めるよ。侵入者に銃を向けてるわけでもなければ、俺を殺そうとしてもう撃つたろ？ 殺さない所を見ると、多分、ユリアの依頼弾丸を撃ち込めだとかそんなところなのだろう。

つか、いい加減俺の上から下りろ。

「中々、可愛い服でしょ？ 私の……学校の制服」

制服？ いや、普通にコート着てるだろ？ お前……。

「いや、それコートだろ？」

ここでもうやく、アレンは自分の声の異変に気付く。明らかに、高くなっている。そして、この長い髪。

導き出される答えなど、知れている。どういう経緯でかは謎だが、現時刻を持って。殺し屋、『カフィン』は女の子になった。

と、言う事だ。

「何だよ……これ……」

戸惑うアレンに、追い討ちを掛けるかのごとく。ユリアはアレンの服を指差している。

「私の学校指定の、制服」

アレンは恐る恐る、自分の身体を見下ろした。……よく分らないが、明らかにこれはスカートなるものである。そしてここでユリアの方が目線の高い事に気付く。身長が百六十程度のユリアより目線が低いのは、何だかショックだ。

「……一個断っておくが、俺は服装のことを言ってるじゃねえ」

大急ぎで事務所の中を駆け抜けると、洗面所の鏡に向かう。

「……これが、俺かよ」

アレンの自分を見た第一声。透き通るような、ソプラノの通る声が、洗面所に響く。

「可愛いでしょ？」

追いかけてきたユリアの口調。そしてその表情は、明らかに何かを“知っている”と言っていた。

「お前……その顔はどうしてこうなったか分かってるだろ……」

「うん、昨日打ち込んだあの弾丸。あれね、ナノマシンで身体を最適化する効果があったんだ。まさか、女の子になるとは思わなかったよ」

ナノマシン？ また新しいのを開発したのか、あの馬鹿研究機関のイカレ学者ども！

「……最悪だ、今日は面白そうなイベントがあんのに」

先読み不能と言つ名の障害（前書き）

さてさて、この辺からネギは暴走しようと思います（笑）
なにがどうなったらこうなっ た のノリが若干この辺から入ってくる予定

先読み不能と言つ名の障害

「面白そうな……イベント？」

ユリアは不思議そうに、アレンを見た。

「ああ、詩人の幹部から、スカウトを受けた。 “うちで働かないか” って」

アレンの言葉に、ユリアも納得した様子で手に持っていた銃を腰に挿す。

「成程。確かに、カフインは殺し屋の最上位とまで言われてるからね。 ミンストレルからスカウトがあつても不思議じゃないし……今までに何度もあつたんじゃないかな？」

「ああ、いままでずっと断り続けた。 今回は、条件付でオーケーしてやったけどな」

ユリアの制服の上着を脱ぐと、アレンはいつもの黒いシャツを着ようとするが、中々着れず、着るのに手こずり、腕を通してきたみたものの、ダボダボでサイズが合っていない。

が、構わない様子でスカートを脱いだ直後。 彼は。 いや、

彼女は赤面した。

自分の穿いていた物をみて、絶句する。

「可愛いショーツでしょ？」

黙っている彼女に、ユリアが言い放つ。

「何着せてんだ、俺はお前の着せ替え人形じゃねえぞ！？」

「いやーん。 怒らないでよ、怒っても可愛いだけで怖くないけど。 安心してよ、その辺のコンビニで買ってきたものだから」

く……クソ……。 完全に、舐めきつてんな、ユリア。

再起動してショーツを脱ぎ捨てると、いつも何時も通り。 自分の着ている服装で、黒いコートを羽織るが中々どうしてこう様にならないのか。

男の時との身長差が十センチ以上あるため、明らかに変だ。

鏡を見て、アレンは思わず黙り込んだ。そして、数秒の空白の後、口を開く。

「なあ、これ戻せないのか……？」

悲痛な、一言。それに対し、ユリアは笑顔を向ける。

「戻せるよ」

予想外の答え。

「ナノマシンを、もう一度打ち込めば良い。ただ、撃ち込んだ時と同じで痛いけど良いの？」

ユリアの言葉に、アレンの表情が一気に晴れる。

「痛みは、耐えればいいだろ？ 戻してくれよ」

アレンの答えを聞いて、ユリアは携帯電話でどこかにメールを送る。

「一応、確認とっておかないといけないから少し待って」

そして、その十分後。ユリアの携帯の着信音の後、ユリアは無言でアレンに頭を下げた。

「ごめん、無理だった」

予想外の答え。

「戻せるんじゃないかったのかよ！？」

アレンが半ば叫ぶ。が、怯むことなく、

「戻せるように造ってあったはずだったんだよ。けど、打ち込まれた後もナノマシンは増えながら進化を続けちゃうから。ボクたち人間の予測と頭脳じゃ、どう進化したのを破壊するか。先読みして破壊するのは無理なんだって。それに、もう一度打ち込んで戻そうとした被検体が全滅したって報告書まで画像添付してきてる」

ユリアの言葉に、再びアレンは落ち込んだ様子で事務所のソファに腰掛けると、引き出しに夜の内にしまっていた拳銃を取り出すと、腰に差し込んだ。

「……まあ、仕方がないな。死ぬモンじゃねえし、何より、詩人の連中を待たせると後が面倒だ」

先読み不能と言つ名の障害（後書き）

Minstrel

minstrel

直訳で吟遊詩人

認識不可能という名の障害

コートのサイズなど気に留めることなく、アレンはバイクにまたがった。そして、アクセルを靴のつま先で蹴飛ばした。バイクだけは、特注だ。

手元にブレーキを付けておいて、今は良かったと思う。

今の身長では、どうしても足のつま先でしかアクセルに届かない。身長が十センチ低いだけで、ここまでの落差が出るものなのか。アクセルを蹴った足で、バイクの側面に引っ掛けた合ったヘルメットを蹴り上げ、右手で手に取るとそれを被る。が、髪の毛が邪魔だ。

「髪、切つてくりや良かったか……？」

事務所には、ユリアを残している。基本的に、あの事務所に隠すものなど無い。アレンが男でも、いかがわしい写真集がベッドの下にあるわけではない。あるとしても、二階の壁や一階の台所の床を叩くと板が回転して出てくる拳銃コレクションしかない。他にあるとしても、兎のホルマリン漬けや、ハツカネズミの剥製など。全くわけの分からないガラクタしか見つからないだろう。

信号で止まると、アレンはヘルメットを取り、視界にチラホラ入り込んでくる長い髪をその中に入れなおす。信号が青に変わると同時に、アクセルを蹴飛ばすと速度を上げた。

風を切り、ビル群の中を切り裂くように疾走する。しばらく走り続けると、ようやく。指定された場所へと到着した。

場所は、とある廃墟。調べた情報によると、一週間後から解体工事が始まるらしい。その、地下駐車場で、待つとのことだ。

その日のうち、正午以降であれば時間の指定は無い。ただ、深夜十二時を過ぎた時点でこななければ、話しは無かった事になるらしい。

詩人という規模の知れない巨大な組織は、アレンのような裏の人

間には魅力である。秩序維持を盾に、堂々と仕事を行える。が、場合によって。

今回のように呼び出された後に、待ち伏せにあって死ぬ場合も多いらしい。

「さて、鬼が出るか……蛇が出るか」

アレンは平然と金網を突き破り、駐車場に乗り入れると地下への通路を突っ切った。灯がある辺り、誰か人間が居る。

バイクのエンジンを切ると、地下駐車場のど真ん中で、アレンは待った。ヘルメットを被ったまま、堂々と直立している。

撃つのであれば、良いのだ。だが、殺される程度のリスクは、アレンにとっては特に大きなものでもない。このまま、アレンを殺すつもりならば。詩人の連中は躊躇無く、このビルを解体爆破するだろう。だが、駐車場に入り込んで五分経つが、一向に爆破する気配が無い。

それどころか、人の気配一つしない。と、感じていた。

だが、それは思わぬ所から最初から、アレンの目の前に居た。

「君が、カフィン？」

第一声。目の前で、無尽の空間から聞こえる声。だが、そこに人は……居た。いつの間に？

「ああ、そうだ。お前……いつからそこに？」

「君が……来る五分钟前から。君が、僕の存在を景色としてしか認識できないのは、僕の生まれつきだね。……おっと、自己紹介をすべきだったね」

白髪の男は、その死んだような瞳でアレンを見た。だが、実際はアレンと目を合わせないように必死だ。彼の瞳に仕込まれたカラーコンタクトがアレンを注視し、実際の眼球はあさつての方向を向いている。

「僕は、音無^{おとなし むおん}。ミンストレルの、戦闘部隊、蜘蛛の隊長を務めている。ああ、出来れば僕をそんないで見ないでくれたまえ。

僕は、人と接するのが苦手なんだ。昔、友達だと思っていた人にタバスコジュースを飲まされてね。それ以降、僕は人を信じていないんだ」

彼はアレンと目を合わせないよう、ついには真横を向いてしまう。何だ、この奇妙な面白人間は……。

「お前の情報はどうでも良い。　　どういつトリックだ、俺の視界に居ただと？」

変声機を通したアレンの言葉に、呆れたように無音はため息をついた。恐らく、アレンの考えている事。そして、隠している事を見抜いている様子で。

「僕の、能力だ。インビジブルサイン不可視の標識、が、僕の生まれつきの力でね。僕から接触しなければ、僕は景色にしか見えない。君だって、そうだろ？ カフィンって“黒ノ棺事件”から活動しだしし。

ちなみに、僕の能力レベルはマイナス？だよ。危険度はSSクラスオーバーだけだね。目を合わせたくないのもそれなんだ。能力者の中に目が合っただけで僕を殺せる能力があるかもしれないし、何より君がそうかもしれないだろう」

無音の言葉に、アレンは驚いた様子で。そして、不敵な笑みを浮かべる。

「そうか。で、俺の姿は分かっているのか？」

「ああ、写真もあるぞ」

無音はポケットを探ると、アレンに投げ渡した。今、明らかに写真からも目を逸らしたろ……。

無音の持っていた写真は、男。そして、今のアレンは……女だ。「名前は割れてるのか？」

アレンの言葉に、今度は違うポケットから無音は手帳を取り出すと赤い付箋のページを開き、軽く息を吸い込んだ。そしてそれをゆっくりと読み上げる。

「アレン・ブラックウッド。分かってるのは名前だけじゃない。

フィオ・シュレーディングアの孤児院出身。その孤児院の火事と同時に、黒ノ棺事件同様。棺に詰め込まれた盗賊が蒸し焼きにされていたのが、君である決定的証拠かな」

若干、面倒くさそうに手帳に貼った新聞の切抜きをアレンに提示する。

「僕は人間の顔見たくないんだけどさ。確認義務があるんだ、そのヘルメット……いい加減とつてよ」

無音の言葉に、一瞬アレンが硬直する。

「……多分、その写真と姿は違うぞ？ いや、違うな」

「別人であれば、殺せと言われてきてる。別人とか、影武者なら……今の内に逃げることをお勧めする。けど、逃がすつもりも無いかな」

腰の鞘に突き刺さっていたナイフを手にとると、無音はアレンに対して構える。が、アレンは動じる様子も無く、躊躇することなくそのヘルメットを脱ぎ捨てた。

コンクリートの地面に、ヘルメットがぶつかる音と同時に。その場の静寂を切り裂くように、金属同士の衝突音が闇に響く！

衝突音の直後。長い黒髪を散らし、アレンは音無の握ったナイフを避ける。避けた直後、銃のグリップを音無に叩きつけると、音無はそれを握り、力任せに引いた。その弾みに、アレンは音無と目が合った。アレンの攻撃的な青い瞳と、音無の死んだような蒼い瞳が合った。

直後、音無はそっぽを向くと、距離を設けてカラーコンタクトを捨てた。

今度は堂々と、アレンを見据える。

「へえ、ずいぶん可愛らしいね。影武者かい？ 僕を……見るなよ！」

突然だった。突如狂ったように、おびえた様子で。無音はその刃を振りかざす！ が、それをアレンは銃の背でいなし、無音の頭に。その銃口を突きつける。

「引き金引けば、お前は死ぬぜ？」

威嚇するように。その鋭い視線が、言葉が、無音に突き刺さった。

「引けばいいじゃないか。僕は、この世の中を呪いながら死ぬだけだ。何でも良い、僕を見るな」

無音もまた自分同様、死を恐れない人間か……。悲しいな、こういう人間を見るのは。

「いや、殺せねえ。撃たれてみるか？ この銃で撃たれても、五時間くらい寝るだけだ」

アレンが銃の撃鉄を引くと、音無しは諦めたように態度まで大人しくなった。

「……君は眼を合わせても殺す力はないんだね。……表に、僕が呼んだ車が来る頃だ。それに乗るか、バイクで付いて来てくれれば良いよ。君は、カフィンの偽者だとしてもスカウトするに値するほど強い」

音無の言葉が終わると同時。駐車場の出入り口からクラクションの音が、コンクリートの壁に響く。

「ああ、これだよ」

認識不可能という名の障害（後書き）

音無君登場♪

次は童子を出したい所だけど、キャラの関係上出せないという悲劇が

そうだな、天才だったし

ナノマシンの開発者で出そうかな……？

§ネギの気まぐれ解説§

能力者レベルは、能力者の魔力の含有量

危険度は、その能力そのものの危険性

能力者レベルが高ければ、その分能力の発動時間が長く

危険度が高ければ、その能力を悪用した場合の被害が大きい。

能力者レベルに差があろうとも？である能力者と？の能力者が戦ったとして

レベルではなくレベル上位者以上に危険度が高ければレベル？がまず、勝つことになる

人間で現在確認されている能力者のレベルは、マイナス？～？。

ゼロも存在

危険度はF～SSまで

後に、作中でこのことは少し触れる予定

仕事の質問という名の壁

無音の指示で、黒いコートの大柄で強面の部下達がテキパキと仕事をこなす。騒ぎによって通報を受けて来た警官を誤魔化し、アレンのバイクをその黒い車の後ろに括り付け、そして手の空いている者が“カフィン嬢”をエスコートするわけだが。

“カフィン嬢”は前二つは良いとして、後の一つ。エスコートというものが気に入らず、むくれている。

「なあ、無音。俺は、今どんな扱いなんだ？」

思わず、無音に問いかけるも、無音は指示出しに忙しいらしい。

こちらの質問に答える気配すら見せなかった。仕方なく、真横まで歩み寄り、

「おい、俺の今の扱いはどうなってるんだ？ 危険人物か？」

耳に直接、その言葉を流し込む。

途端、驚いたように無音はアレンから遠ざかった。

「ああ、君の扱いは丁重について指示してる。けど、彼らは何かしたかい？ 十分もしたら、僕たちは拠点へ行って、ボスに君の事を報告させてもらう。で、運が悪ければ君は死ぬかも。ケド、僕は、守ってあげるから安心してくれていいよ」

真赤な顔で、アレンに返す。　　「どういうわけか、やはり顔を合わせようとはしない。」

視線が合つても、死なないって分かったら？ 何でまだ、視線を逸らすのかね。

「カフィン嬢、こちらへ」

部下の一人が、車の戸を開きスタンバイしているわけだが。アレンはそれに対し、不機嫌な様子で『アリガト』と小さく呟くと警戒することなく車の中に乗り込んだ。

「さて、吟遊詩人^{ミニストレル}第二支部へ向かってくれ。新人の戦力テストをする必要がある」

いつの間にか車に乗り込んでいた無音は、運転席の部下に指示出しを続ける。　どうやら、人と接するのが苦手と言っていたわりには、カリスマ性があるらしい。

その間に、部下の一人がアレンに紅茶を勧めてきた。　どうやら、無音の気遣いらしい。

的確な指示を、順序良く出すのは中々、人間嫌いや自閉症の人間にできる事ではない。

「さて、アレンだったよね？　僕の質問に、答えてもらうよ」

車が走り出すと、無音は再びさっきの手帳を開くとそのページに記されていた質問文を読み上げる。

「質問その一。　君の能力は？　恐らく、君がこの間襲撃した兵器会社のパーティー会場に残されていた黒い塊と関係があるんだろ？」

思わず、アレンはいましたが勧められた紅茶を噴出しそうになった。

いきなり、能力者の。　殺し屋のトップシークレットである能力について、聞くか？　まあ、この場合は答えるべきだが。

「能力名は黒^{ブラック}ノ^{カフィン}棺。　対象の持つ物質エネルギーをそのまま利用して、俺にもよく分からん黒い塊にする力だ。　固まりになった直後、運動エネルギーは消えるからな。　カフィンの襲った所に時々落ちてた黒いビー玉は塊にされた弾が縮小したものだ。　大きさによるが、金属だったら能力発動から数秒で百分の一以下に縮小するからな。　恐らく、ビー玉大だったら大型の対戦車用の大砲だろ」

彼女の言葉に、無音は驚いたような表情で彼女を見つめる。　彼女が無音の方に疑問符を浮かべつつ顔を向けると、無音は顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。　そして、手帳に走り書きを残すと再び口を開く。

「質問その二。　能力者レベルと、危険度ランクは？」

無音の言葉に、アレンは微笑した。

「能力者レベルはゼロ。　危険度はSS。　俺は、魔力なんて持

ってねえよ」

アレンの述べた数値を、無音は再び手帳に書き込む。

「へー、君はレベルゼロなんだ。道理で、話しかけるだけで僕に気付いたわけだ。皆、僕が触れないと気付かないのに」

ポケットを漁ると、無音は更にマーカーを取り出し、レベルゼロという部位に伏線を引いた。

「最後の質問。 彼氏は居る？」

アレンは思わず、その質問に言葉を失った。 これは……

「まさかとは思うが、お前個人の興味本位とか……無いよな？」
アレンの言葉に、無音が一瞬反応したような気がした。

「え？ 違うって、違うよ。 僕の興味本位のわけないじゃないか、仕事だし！ へー、僕が君に恋愛感情を？ あるわけないだろう？ 君は、書類上男なんだから！ 第一、僕より強い阿婆擦れさんに、僕が興味を持つわけが……」

直後、慌てふためいた様に無音は弁解を始めた。 さつきから、
どうもこの男の思考は読めない。

「…… どうでもいい質問だな。 これは答えるべきか？」

「…… どうしても嫌なら、答える義務は無いよ」

どうにも、この様子は仕事上の質問とは思えないが、仕方ないな。
「誰も…… 好きになったことが無いな。 言われてみれば、仲が良かったのはユリアだけだ」

アレンの言葉が終わる頃、窓の外から。 大きなビルが近づいてきた。

自己流という名の壁

しばらくして、車はその太陽を飲み込むような。大きなビルの駐車場へと入った。

見れば見るほど、そのビルは大きい。そして、奇妙な見覚えと地面の所々に点々と落ちている空薬莢。そして、バイクが走り去ったようなタイヤ痕。

アレンの頭の中で、三秒間。この場所に関する記憶の搜索が行われ、結果。ここは、昨日襲撃したビルだということが判明した。上を見上げれば、十二階に当たるフロアの窓の修理工事が行われている。昨日、あそこから飛び降りたのは言わずとも。着地のとき、少し足が痛かったつけ？

「……そうか。昨日の依頼、詩人のテストを兼ねてたのか？」アレンの言葉に、無音が驚いたような表情を向ける。

「あれ、場所分かんない様に回り道しまくったんだけどな。まあいいよ、後々分かる事だし。今気付いちゃっても」

それを気にした事もない様子で。入り口を通過すると無音は自分のことに気が付いていない受付の頬を突いた。中々の美人なのだが、お構いなし。

受付の彼女は、無音に気付くと、彼に銀色の鍵を手渡した。どうやら、俺のことは既に伝わっているらしい。

「で……テストとか言ってたな」

「ああ、言ったよ。何をするかって？ 簡単さ。銃とナイフを持って模擬戦闘を行ってもらおう」

無音に言われるがまま、迷路のような通路を付いていく。途中、大きな体育館のようなフロアを通過する際。飛んできたバスケットボールを蹴り返し、アレンはそれをゴールポストに叩き込んで見せた。

「自己流？ 強いね」

無音はそれを見て面白そうに笑っている。

「さて、到着」

連れてこられた先。それは、ワンフロアの中にボクシングのリングのようなフィールドが無数に設置されたトレーニングルームのような。ただ、よく見ると壁に血痕などがある辺り。そんなスポーツを行うところではないらしい。

「さて、少し待ってて。人呼んで来るから」

その言葉の直後。無音の姿が、アレンの視界から消える。

甘く見ていた。姿を認識できないだけとはいえ、ここまで強力なものは殆ど無い。相手に認識されないのであれば、近づいて急にナイフを差し込むだけで。

ただ、近づいてナイフで刺殺可能なのだ。相手に気付かれなければ、ほぼ確実に一撃で葬れる。

「さて、お待たせ」

案外、時間は掛からなかった。待ったとしても一分も無い。

無音と、もう一人。

黒髪の男が、サングラス越しにアレンを見つめている。

「お前が、“カフィン”か。中々、可愛い姿をしているんだな、殺人鬼。俺は、ルイス・オールディントンだ。音無と同じで、遊撃部隊“蝸”の隊長を務めてる」

「さて、テストは簡単だよ。僕が言いっ言うまで戦えばいい。怪我させても言いし、怪我させられる事もあるだろうし。下手すれば、死ぬから。で、ステージはあれにしようかな？」

無音が、フロアのと真ん中を陣取っている金網のリングを指差し嬉々として言った。どうやら、逃げ場は無い。そして、こちらにとつての利点は無いらしいが、どうやらルイスの反応からしてルイスの嫌いなフィールドらしい。

少し、こっちが有利か？

「じゃー、ルール聞いたところで。早速だけど、始めっぞ」

無音から銃とナイフを受け取り、アレンが金網の中に踏み込むと

同時に金網が閉じた。上下左右、逃げ場は無い。続いてルイスが、アレンの正面の入り口からリングへ入る。同じように、金網が閉じた。

「じゃ、スタート。能力の使用はありだよ」

無音の言葉に、早速、ルイスは能力を発動させたらしい。手の甲に刻まれた歯車の刺青が、音を立てて回転する。

「じゃあ、お前が女ってことで一つハンデをやる。俺の能力は、身体能力の強化だ」

「しらねーよ」

ルイスの言葉を聞き流し、アレンは『パァン』というラップ音とともに、ルイスを力任せに蹴り飛ばす！ が、ルイスはそれを左手で受け止めると、それを引いてアレンを……壁に叩きつける！

「自己流の体術か？ 結構、自己流ってのは聞こえがいいだけで……弱いぞ」

自己流という名の壁（後書き）

どうやら、予約掲載の時間を間違えていたようです
本当は、零時に掲載したかったのですが

私の手違いで十一月ではなく十二月の二十四日になっていました
リア充……まあ、早くになりたいかも（笑）な今日この頃です

超高速という名の壁

アレンは投げ飛ばされた先の金網を蹴り飛ばし、加速する。そのまま、空中で蹴りを繰り返すも、ルイスはそれを片手で容易く受け止める！

「こりゃ、驚いた。ここまで強い我流体術は始めてみた。が、甘すぎるぜ？」

彼の一言。そして、浮き上がる体の感覚。

上に……投げ上げられた！？　まずい、受身が取れない。

「空中ほど、避けるのに適してねえとはねえよな！」

恐ろしい速さで、ルイスの拳が落下するアレンめがけて突き出される！　空を切り、タイミングも完璧だった。

これを受ければ、ほぼ確実に骨が折れる。何より、男のときよりもこの体……脆い！

「いや、案外……」

アレンは頭から落ちることを選択すると、ルイスはいい的だと思ったのか。アレンの顔面めがけ、鼓舞しろ叩き込む！　が、アレンのほうが一瞬早かった。

叩きこまれた拳を、受け止めると、その腕の上で倒立。体を倒し、ルイスを地面に叩きつける！

「避けられなくもない。つーか、女相手に手加減ねえのな」

「男って、聞いてたからな。俺も嫌なんだが……仕事なモンでね。人情とかなんて、言ってるんねんだ。間違った正義も、群れれば正義だ」

ルイスの言葉の直後アレンが爆発音とともに床に足形が残るのではないかと思うような勢いで、床を蹴り飛ばしてルイスめがけて突進する。床を蹴り飛ばした後には、あの黒い塊が。アレンの速さは、異常だった。人間である以上、超えられない力の壁を突き抜けたような。

人間が走った場合。瞬間的に出る最高速度は時速五十キロがい
い所らしい。だが、アレンの身のこなしはそれを遥かに凌ぐ。
文字通り、目にも留まらぬ速さで、ルイスにその細い腕を振るうと、
拳を顔面目掛けて打ち付ける！

「つてえ……。……何をしでかした？ お前の力は、黒ノ棺だ
る？」
ブラックカフィン

「生憎、こつちが本当の使い方だよ。今の言葉を吐いた奴は…
…ペイント弾は使わねえって決めてんだ」

静かにゆつくりと。まるで、先日の襲撃時に見せたあの威圧同
様の殺気を漲らせ、ルイスを威圧する。

「じゃ、何を使うんだ？ その化け物みてえなスピードか？」

「いいや、実弾を使わせてもらってる」

その手に握る銃のグリップをその小さな手で握るとアレンは撃鉄
を引いた。大きな銃に小さな手をめいっばい広げ、それを握り締
める。

その開き切った瞳孔と狂気表情は見る者に畏怖の念を植えつけ
る。視線の先に居るルイスですら、それなりの数の死線を超えて
いる人間だったのだろう。自分に対するこの圧倒的威圧が信じら
れない様子で。動く事を忘れて立ち尽くす。

「へ……。へえ。で、俺を撃ち抜くわけだ」

アレンの答えより先に、発砲の爆発音がビル内を駆け巡る！ そ
の細かな振動に、リングの金網の上に積もった埃が舞った。

「さアな？ いつも通り、確かに撃ったぞ」

ルイスの額を、アレンの放った弾丸が捕らえた。弾丸は額に着
弾し、吹き出す血に、アレンの満足げな表情。

それは見るものに不快感を与えるような。強烈な負の思念を剥
き出しにしていた。

「……で、無音だったっけ？ これで、良いか？」

握っていた銃を金網越しに無音に投げ渡すと、前のめりに倒れた
ルイスに背を向けた。背を向けてしばらくして、彼は額にこびり

ついた紅い液体をポケットから取り出したタオルで拭った。

「……くっせ。 何だ、この臭い？ 鉄か？」

「錆びた鉄粉を少々、混ぜ込んでる。 死の偽装工作だ。 で、もう一度聞くが、これでいいのか？ 無音」

アレンの問いに、無音は黙って頷くと金網を持ち上げた。 二人がリングから出たことを確認し、鍵をかける。

「……結果が出た。 カフィンの戦闘に関する総合技能。 パワーはS、スタミナはB、スピードはSSオーバー。 技能に関しても、SSオーバーだった。 で、これをボスに報告してくるわけだが。 その間、このビル内で待機していて欲しい。 そうだな、ルイス」

「何だ？」

「三階に良い喫茶店があったら？ 彼女にデートを申し込んでみたらどうだい？」

無音の言葉に、思わずアレンは絶句した。

男とデート？ 冗談じゃない。

「そうだな」

「俺が断る。 勘弁しろよ、俺はこの身体になってまだ一日も経ってないんだぜ？」

アレンの言葉に、ルイスは興味ありげに。 不信感を抱いた様子でアレンを見つめた。

「そうだな、可愛い色白の黒髪美人になって一日経ってないって、どういうことだ？」

ルイスの問いに、アレンは不満げに口を開いた。

「殺し屋“カフィン”は昨日の夜に事務所に侵入した別の殺し屋が打ち込んだナノマシンによって、この姿になったってことだ」

超高速という名の壁（後書き）

今回より、五日間

更新はお休みさせていただきます

と、休み報告のかなり不確かなネギが言っていますが
今日明日の更新の可能性は中々高いです（笑）

ただ、更新したとしてもしなかったとしても

三日後に、私が今までやってみたかったことを仕出かしますので
まあ、やらかしても温かい目で見えていただけると幸いです

見た目という名の壁

「一体……どういうことだい？」

ルイスを見ないよう、そっぽを向いた無音が、アレンを問い詰める。だが、アレンの言葉以上に、今現在の彼の状態を簡潔に表せる言葉は無い。

「昨日、懐かしい友人が事務所を訪ねてきて、俺とじゃれた時に、ナノマシンを打ち込まれた」

アレンの説明に、相変わらずルイスは疑問符を浮かべている。

「つまり、ナノマシンでその姿になった……ということか？」

「ああ、そうだ」

「元は、この写真の姿で間違いないのか？」

ルイスは、無音のポケットから写真を引き抜くと、アレンに提示。アレンは黙って頷いた。

「つまり、元は男……ってことか？」

「ああ、そうだ」

「ナノマシンは、どうするんだ？ 変身をキャンセルさせて破壊できないのか？」

興味本位。そして、半ば真面目に聞いてくるルイスに、アレンは携帯電話の画面を突きつける。

“ 新型ナノマシン【クレクトリプレイ】に関する実験結果 ”

そんな見出しの下に、検体名と死亡日時。そして最後のはまめまで。しっかりと記された研究レポートが、アレンの携帯電話の画面にはキッチリカッチリと表示されているわけで。

無音は元より、ルイスは言葉を失った。

「な、男とデート……だろ？」

アレンの言葉が、ルイスに耳に入ると同時。ルイスは気が付いたようにアレンを見つめた。そして……

「ま、何でもいいか。戻せないなら、今後どうするか考えると

しよう。 無音、身体計測を手配してくれ。 もちろん、計測対象は女性な」

「分かった、任せてくれたまえ」

あさつての方向を向いたまま、無音はルイスに言葉を返す。

「なッ……待て待て待て！」

二人の進んでいく会話に、アレンはここでようやく取り残されている事に気が付いたらしい。 相当慌てた様子で、二人の間に割って入る。

「俺は、いい！ 身体計測は止めろ、女向けってことは女がやるってこつたる？」

「ああ、そういうことになる。 お前だって男の目の前で脱ぐのは恥ずいだろ？」

猛反発するアレンに、ルイスはなだめるように言い放つ。

「ああ、その方がな！」

ただ、ルイスに気遣いも無意味に終わった。

「あのな、大体その格好で裸になるんだぞ？ 分かってんのか？」

「ああ、んなことは百も承知だ！」

「悪いが、ボスに報告して来ていいか？ 時間が詰まってる」

大声でとなるアレンと、それをなだめるルイスの間を横切つて。

二人に気付かれる事なく無音はその場から消えた。 無音は初めて、気まずいこの場からいとも容易く脱出させてくれたこの能力に感謝したかもしれない。

見た目という名の壁（後書き）

さてさて、予告通り

これを手始めに

本日は二時間置きの予約更新をやるうかと思えます

『ネギの気まぐれ更新』タグ、つけておいて良かったと今はじめて
思いました（笑）

実際、一時間おき更新がやりたかったのですが、テストという壁が
……orz

毒蜘蛛という名の罇

『中々、面白い人材を見つけたものだな。 無音』

ミンストレル

携帯電話越しに、無音の話す相手。それが、この吟遊詩人のボスであり、変声機を通している辺り。男性化女性化の判別も出来ていない。謎の塊であり、その所在する、一部の幹部にしか知らされていない。

ただ、中には背景に流れる音を聞き分けて位置を特定したというキレ者もいるわけだが。それは一人しか居ない。

「ええ、中々面白いだけではありませんでしたよ。戦闘能力も中々のもので、総合評価がSクラスの上位。能力の幅は未知数ですが、ご報告申し上げた事柄だけで。どうやら“彼”の考えている以上に。あの“黒い物体”には奇妙な力があるようなのですが。どうも、小さく縮小されたものは直ぐに風化してしまうようで。

現在収拾に手間取っている所です」

携帯電話を握る手とは逆の手に、握られたビン。その中には、アレンの能力で発生したあの“黒ノ棺”の欠片がそこに少しだけ溜まっていた。

「どうやら、この物質。いわゆる暗黒物質ダークマターのようでして、恐らくは。後にサンプルをお送りいたしますが、輸送の途中で風化する可能性もございますので。その時は、悪しからず」

電話を切ると、無音は小さくため息をついた。ビンの中に溜まっている物体に目をやり、

「……オリハルコンか」
小さく呟いた。

「嫌だ！ ふざけんなその服装じゃ可愛くないって言っただけだろ？」

無音が二人のいるであろう食堂に向かうと、そこに二人は居なか

った。実際にいたのは、食堂の横。呉服店。

「何でメイド服なんだよ！ スカートも駄目だ、無い！」

「そんな釣れないこと言わないで。ほら、このスカートとかどうかしら？」

ルイスと、店員が一緒になってアレンに“女物の洋服”を勧めていた。それを見た無音は呆れたようにため息をつく。

一体、何をそんなに大騒ぎしているのだから。

「二人とも、一応連絡入れてきたぞ」

無音の言葉に、アレンだけが反応する。だが、ルイスと店員は一切反応せず、スルー。それに対し、無音はルイスに脛を蹴り飛ばすと耳元でポケットから取り出した笛を目いっぱい息を吸った後吹いた。

「んぎゃあああ？ ……なんだ、無音か。驚かすなよ、普通に呼べば気付くつての」

「呼んでも気付かなかったから、こうして笛を吹いたわけだが。アレンの加入を正式に許可するつてよ。事情話したら直ぐにその研究施設に連絡入れて確認取ってくれた。で、アレンの今後についてなんだが……」

今から初任務とか？ なんて、目を輝かせるアレンに対し、手帳を開いた無音の第一声。

「服装は女物を着用。私服も同様とする」

任務などとは全く関係の無い、身だしなみからかよ……。一体、この組織のボスは何を考えてるんだ？

「ふざけるなああア！」

「二つ目に、君が提示した条件に関して。 “事務所” の管理は原則“カフィン” に任せるものとする。そして、こちらからは一切関与しないものとする」

無音の言葉に、若干服装に関する項目の怒りを残しつつも、当たり前だといったように頷いた。

「三つ目に事務所出入りの際。こちらがつける部下を“父親”

または“母親”として、一名そばに置くこと。そして、事務所はつい最近不動産より買い取ったものと工作すること」

「まー、そのくらいなら……。ただ、親は勘弁しろよ。俺は一応成人してんだぞ？」

アレンの言葉に、横でルイスが驚いた様子で口をあけている。

「何だよ？」

「いや、まだ十六か十七くらいだと思ってたぞ」

ルイスの言葉の直後。問答無用で、彼の顔面にアレンの拳が叩き込まれる！が、ルイスはそれを平然と避けた。それに対するアレンの舌打ちを気にする様子も無く。

「四つ目」

「まだあるのか!？」

無音は無言で頷く。

「四つ目。本日を持って“カフィン”を正式に戦闘部隊【バルベロ】の十五人隊長とする」

無音の言葉に、アレンが固まった。アレンがフリーズしたのを、どうやらルイスは理解したようだが。無音には理解できなかったらしい。

疑問符を浮かべて、アレンの顔を覗き込んだ。

「どうかしたか？」

「……組織加入して即隊長格かよ」

「ああ、そうだ。がんばれよ、たまに僕が遊びに行くから」
むんのこと場が終わると同時。アレンの視線が、とある人物一人に絞られた。

「お話は終わったかしら？」

そう。呉服店の、店員である。

それを見た無音の口元が、半ば満足げに笑ったのを、アレンは見たような気がした。

女性部隊という名の罠

言われたように。嫌々、仕方なく、どうしようもなく、店員に逆らう気も起きず。

アレンは女物の制服に身を包み、案内され、通された部屋の椅子に座っていた。

部屋の中には、小物や雑貨などが所狭しと並べられ、真ん中には会議室にある机といえば誰もが思い浮かべるであろう形状の机が、陣取っていた。部屋の四隅を見れば、柱を覆いつくさんといった勢いで。無数の大きなぬいぐるみが大山を形成している。

雑貨が置いてある辺り、隊員は恐らく殆どが女。流石に男が、こんな可愛らしいクマさんのキーホルダーや、猫の置物を置いて回ったりなどしないだろう。部屋の隅のぬいぐるみに関しても、男は殆どいないと思わせる。

「おはようございまーす」

元気のいい挨拶。扉の開く音。その挨拶、多分間違ってる。

もう、昼過ぎ。言うのであればこんにちはだ。

長い髪の、元気のいい女が、アレンの目の前を通過する。当然の事、彼女はアレンの存在を認識したわけだが。

「れ？ 何、この可愛い子！ あーん、こんな可愛いのに制服なんてもつたいない！ 今すぐ可愛いお洋服を……」

「黙れ、殺すぞ」

部屋へ入ってきた彼女は、アレンの冷え切った声に恐れをなした様子で。部屋の隅で人形に埋もれて休眠モードへと移行した。

「ねーえ、君誰？」

不意に、アレンの耳に彼女の小さな声が迷い込んだ。

「“カフィン”だ。今日付けで、【バルベロ】の十五人隊長を任された」

一瞬の沈黙。何か、まずいことを言ったか？

「……隊長が今日変わるって言ってたけど。まさか……カフィンってあの？」

「ああ、そうだ。で、俺は……」

アレンの言葉が終わるか否か。そのタイミングで、彼女はぬいぐるみを吹き飛ばし、アレンに駆け寄った。

「あのカフィン？　ねえ、能力！　君の能力は？」

この女……。一体、何がしたいんだよ？

「俺の能力は、そのまま黒ノ棺だ。^{ブラックカフィン}で、さっきから。お前一体なんだよ？　大体、俺が殺すつつって今までに話しかけてきた奴居なかったぞ」

呆れた様子で、彼女に対してアレンは言い放つ。　が、彼女はそんな言葉などお構いナシだ。

「そうだな、お前は一体……何だ？」

「酷いな。私はこの隊の副隊長さん。ソニアって言うんだ、ヨロシク」

握手を求める彼女の手に、触れる直前。アレンはソニアの手にある指輪に目が行った。黒い金属で出来た、指輪なのだが。内側に、日本の小さな棘が生えている。

「……で、その棘にはどんな毒があるんだ？」

アレンの問いに、ソニアは面白くない様子で

「ちえー、気付いちやったか。よくやるんだ、神経毒。刺されれば一時間は夢の中。その間私が好き勝手するって算段だったのに」

ふざけんなよ？

「勘弁してくれ、俺は疲れてんだ」

面識無しという名の罠

正直、俺は女と話す経験など殆ど無い。　というよりも、人と話した記憶が少ない。

事務所に来る依頼人であれば、必要最低限。　会話をするのだが、それも用件だけであり、いざ会話で話題を振られるとどうすればいいのやら。

それも、自分任せとなるととても困る。

「……そうだな、この隊のほかの連中は？　【バルベロ】は通常は何を行う部隊だ？」

アレンの問いは、どうしても仕事方向に向く。　が、どうやら個々での会話はそれの方がいいかもしれない。　個人経営の事務所であれば、他人との関係を持つ事などない。

だが、部下を持つとなれば部下の事は知っておく必要がある。

「さあ？　私も、会ったことがあるのはレイラとミクとクオードだけだから。　分からないよ、そんな全員の名前なんて」

予想外の答え。　まさか、副隊長を勤める人間が隊の一部としか面識を持っていない？　いいのか、そんなことで。

場合によっては、前の隊長が相当しっかりしていて、副隊長はただの飾りだったという憶測も可能なわけだが。　どうも、そんな風には思えない。

実際、部下をもったことの無い単独任務を行っていたアレンを隊長にしたくらいだ。　カリスマ性などは皆無であり、人の上に建つような人間ではない。

「……いいのか、それで」

「良いんだよ、これで。　【バルベロ】のメンバーは基本的に単体で。　場合によっては二人組みで世界各国で任務を遂行する。

【バルベロ】は独立戦闘組織だから、これで問題は無いわ」

成程。　ほぼ個人で任務を遂行する部隊……俺が配属された理由

が何となく分かった気がする。確かに、他にいれば足手まといだからな。

これでよったのだろう。

「で、基本的な任務の内容はどんなが多い？」

アレンの続けざまの問いに、面白くない様子でソニアは説明を続ける。

「基本、派遣で他部隊の即戦力が多いかな。私は前に知恵戦争

の独立戦闘部隊の指揮を任されたこともあるし、結構ハードなのが多いわ。ただ、前隊長はもっと過酷な任務に当たってたわね。

確か、天使の討伐とか、言ってたけど。私には内容を教えてくれなかったな」

天使の討伐……ねえ。中々、妄想チックな任務だな。

呆れた様子で、アレンはぬいぐるみの山の中に見つけた自動販売機でミルクティーを購入。蓋を開けるとボトルを咥えた。

「で、今日はどうしてここに？」

「新隊長を知っておけつて言う上からの命令よ。で、無音君から聞いたと思うけど……お母さん役の部下。あれが、どうも私になるみたいなのよね」

ソニアの言葉に、アレンは飲んでいたミルクティーを盛大に吹き出した。まさか、あの部下の話も本気だったのか。

「本気で言ってるのか？」

呆れた様子で、アレンはソニアを見据える。が、ソニアは結構まじめといった表情だ。

「ええ、そうよ」

いやいやいや、無理があるだろ。

「何で、俺の母親役がそんな若いんだよ？ 変だろ、お前。二十代の人間に、二十代の息子の親役が務まるわけねえって」

笑い混じりに、ソニアに対して言い放つ。

「そうよねー。そこは同意するんだけど、息子って？ 娘の間違いじゃないかしら？」

「……男に向かって娘とか言うな。虫唾が走る」
いじけたように、アレンは椅子の上で小さく丸くなった。それを見て、ソニアは今すぐにでも襲い掛かりたいといった様子で、その衝動をこらえている。

「……俺さ、昨日まで男だったんだ」

昨日は男という名の罠

ソニアはアレンの言葉に、疑問符を浮かべている。もちろん、突然のそんな馬鹿げた告白を信じる方が、よっぽど馬鹿だ。

「昨日の夜、事務所に友人が遊びに来てよ……俺とじゃれてたらナノマシン打ち込まれてさ。朝起きたらこの有様だ、情けねえ」
もはや、自己嫌悪モードの真っ最中とでも言うべきか。アレンの様子は、十人見たうちの十人が落ち込んでいると答えるであろう状態だった。

「それによー。俺の本名、カフィンじゃなくてアレンなんだよな。女でアレンも変な話だけどよ、なんか周囲の視線が気持ち悪いって言うか、なんつーか。はあ……しばらく、放っておいてくれ」

「そんな言葉の直後で悪いが、カフィンに初任務だとさ」
アレンの言葉を遮るように。そして、否定するかのよう。いつの間にかそこにいた無音の言葉が、彼に突き刺さった。

「無音……ほんつとーに心臓に悪いな。お前」

アレンは呆れた様子で、更に椅子の上で縮こまった。

「ありがとう、最高の褒め言葉だ。で、初任務は技量を測るよなもんだからな、死ぬほど簡単だ」

アレンの席の前に、一枚の写真が提示される。無音は手帳を開くと、写真に見向きもしないアレンの横でそれを読み上げた。

「最近活動が活発になってきた殺し屋。“ラビット”の討伐と結果の報告だ。情報収集はカフィンに任せると、上から命令があった。以上、初任務がんばってくれ」

アレンの前で用事を済ますと、まるで空間に溶け込むかのように。彼は歩き去った。

「へー、この子も可愛い」

ソニアが勝手に、机の上に置き去りにされた写真を手に取り、小

さく呟く。

「……ソニア……だったっけ？ 俺を、拒絶しないのか？ つーか、写真返せ」

ソニアから半ば奪い取るように、アレンはその写真を手の中に戻すと、ターゲットを確認する。が、その写真を見た途端。アレンは言葉を失った。

写真に写っているのは知った顔だ。 昨日、丁度見た顔だ。そして、アレンがこうなった原因を打ち込んだ人間の……顔だった。

「ユリア……なんでだよ」

思わず、アレンは彼女の名を口から漏らす。

「あれ？ 知り合いですか？」

「……そうだ。 昨日、事務所に遊びに着たって話。 ついさっ

きしたばっかだろ？ その遊びに来た奴……」

個々まで聞けば、ソニアも薄々それを感じ取っていた。

「こいつなんだよ」

予想通りの、答え。

友人殺しという名の罠

どうする？ 一回目の任務。 初仕事で、ユリアを殺せって？
冗談じゃない。 彼女が、“ラビット”？ 任務はラビットの討伐？

無音の言葉が、アレンの脳内でグルグルと回る。 何か解決策を講じようとも、油脂阿賀標的だという現実が邪魔をする。

初めてかもしれない、こんなに躊躇する任務は。 初めてだった。 人のために、こんなにも何かを考えたのは。

「……アレン、泣いてる？」

ソニアの言葉に、アレンは耳を貸そうともしない。 涙が頬を伝う。

彼女を助ける術は無いのか？ いいや、あるではないか。 この組織を裏切ればいい。 だが、それだ単なる逃げにしかない。

俺が断ったとしても、他の誰かがユリアを殺すだろう。

どうするんだ？

しばらくして、アレンは吹っ切れたように笑った。 乾いた笑い声が、部屋の中に響く。

「で、もう覚悟したのかい？ ユリアって言うんだろ？ あの子、君の友達なんだろう？」

「知ってて俺に討伐しろって？ 中々、意地悪な難題吹っかけてくれるじゃねえか」

カフェでコーヒーをすする無音をどうにか探し当て、アレンは勝ち誇った様子で言い放つ。

「どうも、ユリアが標的だってんで気が動転しただけだ。 んじや、今から少し行ってくる。 あー、そうだ。 今日はいいだろ？ 事務所にこのまま帰っても」

それだけを言い残すと、アレンはビルから出て直ぐに。 車に縛

り付けてあったバイクにまたがると、エンジンを掛けてアクセルを蹴飛ばした。

もう、夕方か……。 頬を撫でる風が冷たい。 冬が、近い。

「おい、ユリアー。 鍵あけるの面倒だからそっちからあけてくれ」

アレンの声に、事務所の中のユリアが反応する。 しばらく足音が続き、前触れも無く。 事務所の戸が開いた。

「お帰りー……遅かったんだね。 で、一個相談があつてさ」

「何だ？」

ユリアから話を切り出してきたか。 まあ、後で話す手間が省けてよかった。

「ボクさ、しばらくこの事務所に潜伏しようと思ったんだ。 面倒なのが、私を追ってる」

面倒なの？ まあ、居候くらいなら……。

「問題ない。 で、俺からの情報。 初任務が、“ラビット”の討伐。 つまりユリア、お前の討伐だとさ。 で、反抗するか？」

アレンの問いに、ユリアは驚きを隠せなかったらしい。 だが、

ユリアも直ぐにその言葉の意味を読み取った。

「いや、しないよ。 ボクをその吟遊詩人 ^{minstrel} に連れて意味なんですよ？ 普通に呼べば、別に何もしないものを……」

「正解。 じゃ、表にバイクが止めてある。 ヘルメット被つて、振り落とされないようにしっかりしがみ付いてろよ。 以上だ」

初任務完了という内容の報告

中々、詩人のボスは意地悪な奴らしい。バイクを走らせるアレンは、そんなことを考えていた。

人殺しを雇ったくせに、初任務が殺しではない。そのくせ、討伐などと殺しを連想させるキーワードを出す辺り。人間の心理をよく理解しているというか、何と言うか。

そんなことを考えている内に、日は沈んでいく。辺りが闇に閉ざされる頃。ようやく二人は詩人のビルへと到着した。

「さてと、ユリア。俺について来い。変なトコいじるなよ」
アレンはそれだけ注意すると、ビルに入ると直ぐの受付に向かい、
「無音はどこにいるかわかるか？」

用件を述べる。それに対し、受付の彼女はカウンターのしたから受話器を取り出すとアレンに手渡した。

『もしもし？ ああ、アレンか。で、どうした、その後は？』

“ラビット”は討伐したか？』

「ああ、問題なく。“ラビット”は反抗しなかったため、“討伐”できなかった。だが、ラビットの消失は確認した。で、報告はいいか？」

『そこで待つてろ、直ぐ向かう』

アレンの問いに答えを返す前に。無音は電話を切った。

「待った？」

待つ事物の三十秒。それくらいの時間で無音はそこにいた。どうやら結構近くにいたらしい。

西手も、毎度毎度突然出てこられるのは心臓に悪い。

「なあ、それどうにかなんね？」

「無茶を言わないでほしいな。オンオフ付けられない能力だから、無理。それはさておき、どうだったんだ？ “ラビット”が

消失って」

無音は不思議そうに、アレンに問いかける。　が、アレンは得意げな様子で。

「“カフィン”に取り込んだ。　で、問題ないだろ？」

ふざけているとも取れる答えを、吐き出した。

「へえ、なるほど。　“カフィン”が個人名か組織名が決まってい
ないのを利用して、“ラビット”をカフィンとして取り込んだわけか。　オーケー、それで報告させてもらうよ。　で、明日はアレン。　君だけ出来てくれ。　明日の君は、結構忙しく予定があるらしいからね」

身体計測という名の難関

翌日、事務所で目を覚ましたアレンは面倒くさそうに前日の出来事を思い出した。吟遊詩人 ^{minstrel} の正社員になった。で、今日は朝が早い。

つまり、もう着替えて出かけるべきなのだ。

寝ぼけた様子で、アレンはコートに身を包むとその撥ねた長い髪を押しつぶすように撫でる。が、癖は取れない。仕方なく、水を被ってタオルでそれを拭いた。

「ブラシとドライヤー、必要だな」

そんなことを言いつつ、支度を済ますと車庫に止めてあったバイクにまたがり、エンジンをかける。そして、昨日同様。しばらくその足はアクセルを探すが、爪先意外届かないと判断すると、彼女はそれを蹴り飛ばした。

ここからは男声諸君お待ちかね。アレンの身体計測である。

詩人のビルについて、無音の第一声。

「今日、八回の医務室に行って身体計測しろって。上からの命令があつた」

そういうことである。アレンの、身体計測。確かに、昨日やれって言われたっけか。

身長を測ったり、握力の測定をしたり。そんなことだけだろうと思っていた。だが、アレンの思わぬ計測が一個。

スリーサイズ。というより、バスト。

そう、胸回りの測定である。

「嫌だ、女物の下着は絶対断る！断じて、俺はそんなモン着ねえぞ！」

医務室で、アレンの怒号となにやら暴れるような音が廊下に漏れる。もちろん、社員は興味津々。男女問わず医務室の入り口を少しだけ開けて中をのぞく怪しげな集団を、更に事情を知らずにそこを通りかかったメンバーが何をやっているのかと、不審の目で見ていたわけなのだが。そんな視線を気にすることなく覗き続ける。アレンの組織への加入は昨日の出来事であり、アレンの事情を知っているのは無音とルイス。そしてソニアの三人だけだったのもあって、医務室から聞こえてくる可愛らしい少女の声の内容には、聞く者全てが耳を疑った。

「スーツは良くて下着は駄目なんですか？」

計測医の言葉に、

「スカートも嫌だ、無論。有り得ない」

アレンの怒鳴り声が返される。だが、個々の組織の連中はその殆どが能力者。それは、計測医も例外ではなかった。

「そうですか、気が引けますが……仕方ないですね」

その言葉の直後、アレンは体が固まったように感じた。そして、その感覚は間違ったものではなく、実際に身体は凍りついたように動かない。

「温暖氷結です、^{フリーズ}空気を固体化して君を氷付けにしました。抵抗はできませんよ、大人しくしなさい」

計測医が、スケールを持ってアレンにギリギリと歩み寄る。メガネの奥の表情は、まるで怯える相手を楽しんでいるかのような。そんな意地の悪い表情を浮かべて。

「いや、嫌だ、止める！……離せエエええ！」

アレンの悲痛な叫びが、廊下に木霊する。

「うーん、ギリギリCカップって所ね」

「何満足げな顔してんだよ」

アレンが怒ったように計測医を睨み付けるわけだが。彼女はその視線に何も感じないかのように今しがた測定結果を書き記した書

類をアレンへと投げ渡した。

「さて、それを持って無音君のところへ行きなさいな。運がよければ今日中に恋人成立するかもよ？」

彼女の言葉は、鳥肌物だった。

波い店主という名の難関

なんだかんだ。計測結果を渡された後に計測医がアレンにブラジャーを付けようと踏みよったことでアレンが上半身裸のまま。あられもない姿で医務室を飛び出す以外は、特にこれといって問題は無かった。

上半身裸で医務室を飛び出すことも、十分、大事件なのだが。アレンの思考では男のときと同様。特に、気にする事でもないという結論が下された。

そして、その先で無音と遭遇したという大事件もあったわけだが。無音は顔を真っ赤にして上着をアレンに投げ渡し、事件はそれで終結した。

慣れた手つきで無音の投げたコートを羽織ると、アレンは無音意連れられるがまま。更衣室へと放り込まれた。

「一応、ロッカーに名前があるはずだ。それ、お前用な。で、計測結果は僕が医務室に取りに行くとして、それまでに制服着て……そうだな。一階の喫茶店でいいか。そこでコーヒーでも飲んで待つてくれよ。朝飯くらいは奢つてやる」

無音はそういうと、オーラム金貨をアレンに投げ渡した。確かに、コーヒー大にしては多すぎる額だった。コーヒーがクブルム銅貨三枚で買えたとして計算すれば、二百杯分に相当する。

円に置き換えれば、一万八千円に当たる金額である。サラツとそんな金を奢りだという一言で人に渡すのか、無音^{アレ}は無音は。

一体、何を考えているのやら。更衣室に向かうのを後回しに下の階へエレベーターで向かうと、喫茶店は直ぐ目の前にあった。

カウンターの適当な椅子に腰掛け、アレンの第一声。

「レギュラーコーヒー二杯、片方は角砂糖最低でも五つ入れて。で、そうだな……ブリオッシュ一個と、……あ、そのレアチーズエクレアってやつ一個」

カウンターの先にいた“渋い”と形容するのがとても似合うおじさんは、カップを二つ取ると角砂糖を片方に流し込み、淹れたばかりのコーヒーを注いだ。

コーヒーの横においてあったマドラーをそれに指すと軽くまわしてアレンの前に出す。

「もう一杯はどうするんだ？ ……彼氏待ちだろ、お嬢さん」

お決まりの台詞と言うべきか何と言うべきか。店主とも呼ぶべきそれは、アレンに言ってはならない発言を吐き出した。その言葉に、アレンは半ば怒りを露に、店主を睨む訳だが。

「ハッハッハ、冗談だ。ま、凶星つてところかい？ で、そうだな、後で出すよ。で、さっき注文したブリオッシュとエクレアだ。そう睨むなって、可愛い顔が台無しだぞ？」

カウンターの下の収納から、彼はその二つを取り出すとコーヒーの横に添えるように差し出した。

「……オッサン」

「何だ？ お嬢さん」

お嬢さんの言葉に、アレンは一瞬反応するが、馬鹿らしく感じたのか。反抗するのをいい加減に止めた。

「オッサンはさー、このビルが何か分かってて。それでここで働いてんの？」

アレンの言葉に、驚いた様子で瞬きを数度繰り返した。

「知っているよ。特にここ、第二支部は殺し関係者が多いからな。君が、今まで何人殺したかなんて聞くつもりは無いよ」

店主は相変わらず。マイペースを守りながらアレンのことを気遣っている。

なんか、氣遣われるのは慣れないな。

「……俺さ、この間までずーっと一人でいたから。仕事以外で人と無駄話するのは久しぶりだ」

「そうかい、そりゃ良かった。で、どうやら待ち人が来たようだな。無音、彼女連れとは珍しいじゃねえか」

アレンの気付かない内に。 相変わらず無音の姿がないと思っ
いたその空間から。

「ああ、珍しいだろ？ ケド、彼は男だから。 僕の彼女じゃな
いよ」

突如現れたかのように。 “ずっとその場に立っていた” 無音が
姿を現した。 相変わらず、神出鬼没だな。

「さて、どうやら僕の方までコーヒーを頼んでくれてたみたいだ
けど、僕はレギュラーコーヒー嫌いだからさ。 マスター、僕はホ
ットミルクにしてくれよ」

「いいのか？ 折角このお嬢ちゃんが注文してくれたのによ」

波い店主という名の難関（後書き）

円に直してみた

オーラム	金貨	18000円	金	100%
アルゲン	銀貨	5000円	銀	100%
ハーフ	銀銅貨	500円	銅	50%
クオータ	銅銀貨	100円	銅	75%
クブルム	銅貨	30円	銅	100%

名称は金属の含有量によって変化

一人称私という名の難関

「さて、腹ごしらえもすんだ事だし。確か、今日の君には任務が無かったね。僕も無いし、能力訓練室での鍛錬がいいところかな」

アレンは無音の言葉に流されるがまま。むしろ、このビル内のことを覚えるべきかと考え、無音に振り回される事を選択した。

「そういえば、ユリアは？」

「あいつは事務所で寝てる。基本、殺し屋って性格じゃないし。顔の割れてない人間だから、あの物件を買い取ったお嬢様って所だな。で、訓練室ってのは……何の拷問をする所だ？」

アレンの問いと、恐らくこれを見た誰もが同じことを言っただろう。連れてこられた部屋は壁一面血まみれ。赤い斑点どころか大量出血の流血騒ぎがあったのではないかと思わせる“水溜り”が数箇所。

そして、壁一面居並んだギロチンやらなにやら。処刑道具や拷問道具の数々。訓練をするところというイメージとは、大きくかけ離れた空間だった。

「良い質問だ。答えはYES、拷問室も兼ねてる。さて、そうだな。レベルゼロ能力者は初めてだし、どのコースにしようかな……」

室内の一角に設けられたカウンターに向かう。

「そうだな、ネイヴィーの凶悪殺人犯。アーガス・ロッチを相手に殺されずに殺せるか……でどうだい？」

金髪の男と談笑しながらアレンに戦闘相手を提案する。確か、それって連続殺人犯だっけ？

「まだ捕まっていって聞いたけど？」

「ああ、捕まっていな。僕が殺しちゃったからさ、世間的には身を潜めてるって認識だろうケド、あの脅威は排除した。で、

このイケてる彼がそれをコピーしたダブルとの戦闘を可能にする。
彼の能力でね、レベル？の中では恐らく最上位の力だと思つよ。
能力そのものの危険度はAだけど、コピーした相手によっては無
敵の力だ。 さて、ジャック、頼んだよ」

それだけ言い残すと、無音は再び景色に溶け込むように。 その
存在を消し去った。

恐らく、まだその場にいるのだろうか……死人で来ても認識は不
可能。 もはや景色である。

「さて、そうだな。 君がカフィンか、中々……可愛い顔してる」
今までと同じような台詞。 だが、もうアレンはそんなことで腹
を立てるつもりはなかった。 むしろ腹を立てていれば気疲れして
しまう。

「そりゃーどうも。 で、俺はどうすればいいんだ？」

「……そうだな、取り敢えず『俺』禁止。 一人称は『私』で統
一しろ」

ジャックの言葉が終わるとほぼ同時、アレンは我を忘れてジャッ
クに飛び掛っていた。

「何で俺が私って言わなきゃならないんだ！」

「その方が女らしくて可愛いだろうと思ってだ。 後で長老会に
その議案を提出しといてやるから、慌てなくてもいいぞ」

……このビルにいるのは、化け物ばかりだ。 今、そう感じた。

馬鹿げた会話と何気ない仕草。 そして、ただ単純に頭をかこう
としただけだったように見えたそぶりの合間。 背に隠れていた太
刀を片手で。 軽々と振り回すとアレンの蹴りをその峰で受け止め
たのだ。

「化け物かよ」

「いいや、俺は特に。 そうだな、階級は知ってるか？ 君はま
だ階級を貰ってないようだが、恐らくこの調子だとSって所か。
俺は、SSだから君じゃ勝てないってことになる。 まあ、俺単体
であれば君の勝ちだけだな。 さて、部屋の真ん中に居てくれ。」

俺がダブルを召還する」

能力発動と言う名の難関（前書き）

本日ラストです

五日の準備期間があつて、実際は一時間更新の予定でしたが、テストやら提出物やらなにやらイレギュラー要素と言う見落としが多々ありまして二時間置き更新に収まった次第です

よし、次こそは一時間更新します
今度は、前触れナシで

能力発動と言う名の難関

爆発音。そして、金属同士の擦れるような音が室内に響く。

「おー、やってるやってる。しかし、強いな。カフィン」

廊下にまでもれるその音を聞いて、ルイスが扉をくぐった同時。アレンの弾丸がこめかみを掠ると言ったハプニングはあったが、特にルイスは気にする様子も無くジャックの横に腰掛けた。

「どうだ、戦闘能力。……あれで何人目だ？」

大柄な大男のダブルを相手取るアレンの横で、ルイスたちは談笑を始める。

「確か、十三人目って所だ。アーガス・ロツチを瞬殺して、八人目まで。ランクAの上位者までは瞬殺決めてくれたぞ。九人目から、Aランク下位の危険人物を投入してるんだが……未だに息一つ上がってない。どうなってんだ、あの女……」

まるでありえないものを見ているような視線をアレンに向け、ジャックはルイスに問う。だが、その言葉を聞いて驚いたのは、ルイスも同じだ。

まさか、あんな十代の女の子が危険人物を相手取って瞬殺。それも、何人も。

驚かない方が、おかしい出来事だ。

「この訓練で、今のところ同じような結果を出した奴は？」

「聞いて驚け、吟遊詩人^{ゴースト}の大隊長一人だ。それも、大隊長に関しては今の十三人止まりだったからな。これの次倒しちまったら、カフィンの方が強いってことになる」

ジャックの言葉が終わると同時。アレンの蹴りが、金属音とともに大柄な男のダブルの顎にクリーンヒットした。そのままダブルは、ダメージの許容を超えたらしく、霧散して消えた。

「……やりやがったよ。隊長と並ぶとは、恐れ入ったぜ」

「で、まだ続ける？」

ジャックの問いに、アレンは無言で頷いた。汗一つ掻いている様子も無く息を切らしても居ない。

「そうか。ここからは“マトモな武器”が必要になるからな。その銃じゃ歯が立たないぞ？それでもやるか？」

「……能力を多用して戦えってことか？平気だ、あの“ブラックカフィン黒ノ棺”は弾切れが無い力だし、実際。アレの真価は、相手を固めて棺に納めることじゃない。できれば、外がいいんだが……」

アレンの言葉に、ジャックの口元は面白そうに笑っている。

「分かった、十四人目倒せたらいいぞ」

ジャックの言葉とともに、部屋を中心に再び。今度は黒い人の形を模した影のようなものが出現した。

今までの“人間”とは違う。黒一色のそれは召還されるが否や、間髪を居れずアレンに襲い掛かる！が、アレンはその起動を完全に読んだ上で。右手をその影に対し、突き出した。

「能力発動……“マイナーチェンジ・ブラックスピーア黒ノ槍”」

彼女は、言葉によって。能力の引き金を引いた。突き出された腕に、言葉が纏わり付くように腕の周辺の空気が渦を巻く。そして——貫いた。

黒く鋭利な刃の先が、影を串刺しにする。影は数度痙攣すると、あっという間だった。

召還されて恐らく最短。五秒も無い内に、霧散した。

「……嘘だろ。……分かった、屋上に移るぞ」

能力発動と言う名の難関（後書き）

ネギの今更キャラクター紹介

アレン・ブラックウッド

性別：男↓女（現在進行形）

経歴には謎が多く、殺し屋業は彼女が十五歳のときに開業以降六年間に世間的に殺した人間は数知れず。

ただ、六年間も殺し屋をやっていたわりにその人数は三十人以下と、とても少ない。

ネギの都合：命名は結構適当に、ギリシャ神話のアレスから。そして、単純に。彼女が女にされてしまった理由は作者である私の興味本位。元々は、暗い殺し屋系の小説になる予定だったが、コメディ要素を取り入れようとして無理をした結果。今の状態に落ち着いた。

近々、挿絵を描いてみようか検討中

ユリア

性別：女

アレンと同じ孤児院出身。経歴も、アレン同様。十歳以降を辿る事ができない。

なにやら、秘密がある様子。

ネギの都合：特に、考えることなく。条件は長い金髪の女。と言う条件だけで、性格は元々決まっていたため名前は思いついたものをそのまま使用した。

後々、彼女には結構重役をやってもらう予定。

音無 無音

性別：女↓男

経歴不明。彼の存在を認識できる人間が存在しなかったため、八歳から十四歳まで。彼の姿を確認した者は居ない。

ネギの都合：別作品で出演した際、無音の元々の性別は長い白髪赤目の女だったはずだったのだが、ここで再登場させた結果。ネギの気まぐれにより、性転換を無理に敢行。

やっちまった……と思ったが、元々、無口で暗いだけのキャラだったので、若干アホっぽい成分が混ざってよかったと思う。

何だかアレンにお熱な様子。

ルイス・オールディントン

性別：男

とある傭兵部隊出身。その間に数々の体術を身に着けた、戦闘マシーンとまで言われた危険人物。

ミンストレル吟遊詩人には八年前から所属。過去を語ろうとはしない。

ネギの都合：別サイトで執筆していた作品に数話のみ登場させた噛ませ犬。正直、彼自身は相当強い設定になっていたのだが、小説内の不死鳥によって消し炭に。

キャラ自体は気に入っていたので、今回再登場させてみた。能力の設定は、今回始めて与えた……ハズ。

ジャック

性別：男

ウイスデム

知恵戦争に投入された人工能力者“トランプ”のジャックに当たる事から、その名が付けられた。経歴は不明。

幼い頃から、“トランプ”の研究組織にいた。

ドッペルゲンガーを召還する能力は、つい最近身につけたものであり、彼自身の戦闘向けの能力はまた別に存在する。

太刀を武器として扱い、まるで棒切れのように振り回し、文字通り断ち切る事得意とする。

ネギの都合：元々、別の小説で使用したキャラを多用する癖のある

私だが、このキャラに関しては主人公だったと言う過去が存在する。何故、今はトレーニングルームの対戦相手を召還しているのか、どういう経歴でそこに収まったのか。 私にも謎である。

マスター
店主

性別：男

結構、ガタイがいい大柄な色黒男。 温厚な性格で、好きなものはコーヒーの匂いなどと。 その見た目からは判断がつかないようなものが好きだったりする。

恋愛事情を気にする、見抜く、耳打ちするなど。 結構お茶目な面も。

ネギの都合：失敗キャラ。 考案当初はそんな感じでした。 ですが、出してみたら案外。 いいキャラだったのに驚いた。

無いな、と思っていたわりに、今は結構好きなキャラ。 まだこの後何度か登場する予定。

未登場陣

クロア・ディナイアル

性別：男 …… 超極度の甘党。

黒薙 童子

性別：男 …… 世紀の天才。 容姿は十代から二十代だが、その年齢は不明

アリソン・ForP・セイファート。 通称：アリソン・セイファート

性別：女……とある海賊船の船長であり、年齢が四桁と言う怪物。 彼女に関しては登場は怪しい

ヴァン・ノクターン

性別：男 …… 中世的な顔立ちで、紫がかつたくろかみに真紅の瞳を持ち、大人しい性格とは逆に外見は恐ろしい。 礼儀正しく、気長で大らか。

まだ、若干数名

アドリブでの追加もあるので、どうなるかは私にも不明です

ファンクラブと言う名の陰謀

「先日、組織に加入した“カフィン”について……どうなっている？」

薄暗い室内で。まるで直射日光を遮りその見に浴びることを恐れているのではないかと思うほど。それほどまで、嚴重に光を遮ったその中で。

黒い棺の中で上半身を起こし、闇の中で二つの真紅のメダマが。確かに、がなるような声でそう聞いた。

「その件であれば、現在ジャックが戦闘能力の計測を行っている」と聞いてますよ」

闇の中に、もう一人。透き通るような、女の声が、部屋の中を駆け抜ける。

不意に、電話の着信音。

「……どうやら、計測結果が出たようですよ。驚きましたね、初計測。初期値設定がSだったにも関わらず、測定結果はSSオーバー……ボクより強い可能性があるとまで示唆していますね」

「ほう、面白い人材だな。その“カフィン”とやらは」

棺桶の蓋が、閉まる音とともに、部屋の中に昼日中。カーテンが取り除かれた結果、最も強烈な熱光線が降り注いだ。

「じゃ、このことは長老会に報告しておきますね。なにやら、元老院ジジイの中には個人時代からのファンが居るようでして、今日は恐らく。賑やかですよ、来ませんか？」

陽だまりの中、その長い金髪を揺らし、彼女は棺に問う。だが、数秒の沈黙の後、

「やれやれ、行きたくない……ですか。分かりました、今回もボクが仕切っておきますね」

彼女は陽の光に身を包み、その部屋を後にした。

「今回の会議も、“彼”は欠席すると……？」

「そう言っただけだよ、最長老^{クソジジイ}」

黒い、覆面で彼女は顔を覆っている。今しがた、棺で眠っている彼の元から会議場となるビルの最上階に到着した所なのだが。

どうも、先ほどとは様子が打って変わってひんやりと冷えた印象を受ける。

「……人形の分際が、最長老様をクソジジイとは何事だ！」

長い机に向かう数名の一人から、彼女に対して怒号が発せられる。が、彼女は知らん顔だ。

「でも、“彼”はいてもいなくても。喋らなければ結果は同じ。そーそー、ボクは確かに人形だよ。だから、後片付けたのむね」

言葉が終わると同時に。彼女は糸が切れた人形のように。突如、床に突っ伏すとピクリとも動かなくなった。それを見て、何人かは頭を抱えて呆れた様子で彼女を見る。

その長い金髪を散らし、ガラス球のような瞳で。遠くを見ているように、床に突っ伏している。

「……如何に我々人間の発展に貢献したと云えど、この無礼極まりない態度は受け入れ難いものだな」

彼女に対し、怒号を発した声の主が。気に入らない様子で呟いた。

「そう言っただけ。では、カフィンのこの後の用途について検討するんじゃないか」

*** ** *

「……一個、聞いておきたい」

ジャックが静かに、屋上に出てきたアレンに対し、問いかける。

「俺の能力は全快で使うと範囲が広いんだ。多分、屋上^{こゝ}でも狭

いくらいだな」

しれっと、アレンは言い放った。三十メートル平米、九百平方メートル内で、狭いと？ 大体、能力者の能力はプラスマイナス問わず。半径十メートル以上あれば相当広いと扱われる。

半径十五メートルで、狭い？ 馬鹿言うなよ。

「本気になった時の、能力の発動範囲はどれくらいあるんだ？」

ジャックの問いに、アレンは少し考え込んだ。だが、直ぐに彼女は口を開く。

「……多分、半径五十メートル以上。今まで能力を発動した最高が半径四十八メートル内だったからな。大体、そんなモンだろ。本気で使ったことは今までないし、もう少し広いと思うぞ」

平然と答えるアレンに対し、ジャックの脳は凄まじい速さで回転を始めた。

半径五十メートル以上。聞けば聞くほど、出鱈目な能力範囲。

それが最高値ではないだって？ そんな、馬鹿げた事があるものか。

悪魔でもあるまいに、そんな広範囲に影響を及ぼすなど……人間のできた事ではない。

「分かった、それじゃー……ここだと狭いな。第八鍛錬施設に行つて見るか、あそこは相当広い」

そう呟くと、ジャックは屋上の開け放たれたままになっていた扉を閉じると、餅手にダイアルのついた鍵を差し込んだ。

ダイアルの数字を小声で復唱し、揃えたとそれを捻った。

ガチャリ。そんなベタな音とともに。鍵は開いた。

扉の向こうには、白い巨大な部屋。そして、無数の人間。白い巨大な箱の中のような、その空間に。見渡す限り、それが広がっていた。天井は恐らく、百メートル以上あるだろうか？

文字通り、

「箱の中……？」

そついうことである。アレンは思わず、そんな言葉を呟くわけ

だが。

付いて来たルイスは懐かしいと言った様子で。 近くにいた戦闘研修生の指導に当たる教師の下へと歩み寄っていく。

無音は……居ない？ いや、認識できないだけで、キッチリと付いて来ているに違いない。

「さて、それじゃ始めるぞ。 ルイスが非難するように言いに行ってくれたからな。 そこに立っててくれ。 ここからは、エンドレス。 俺が延々と影を召還するんだが、耐久で行くか？ それとも、俺が果てるか君が倒れるまでのエンドレスで行くか？」

「エンドレスに決まってるだろ？」

間髪をいれず。 アレンはそれに答える。

「……俺の同時召還の最高数は百だ。 じゃ、始めるぞ」

ジャックの言葉と同時に。 アレンの足元から、無数の泡が吹き出したかと思うとそれが形を成した。

さっきの影と同じ。 完全な影だけの、黒い人型の何か。 それに対し、躊躇無く。 アレンの第一波が箱の中を駆け抜ける！ 衝撃波のような、黒いリングが。

広がりながら、影を次々と吹き飛ばす！ 辛うじて避けた影、召還されてくる影。

そんなものなどお構いなし。 次から次へと、集団を相手に彼女は平然と。 慣れた手つきで次々と。 銃を使うことも無く、黒い靄のようなものが。 彼女の視界に映った影を次々と、拘束したかと思うと押しつぶす！

「……ジャック。 止まってくれ、変だ」

だが、それは突然。 アレンからそれを言い出した。

「前は、これだけ連続して使えば動けなくなるほど疲れたんだが、全く……疲れが来ない」

ヒトクイ人種と言う名の陰謀

アレンが嫌なものでも見るように、自分の両手を見る。 汗一つ無ければ、体が異常な熱を持っているわけではない。

ただ単純に、疲れない。 息も切れなければ、体力の底が無い。自分でもわけの分からない、奇妙な現象。

「君の知りたいことのヒントをあげよう。 君に打ち込まれたナノマシン、トイクレクトは宿主の健康状態を最良に保ち続け、自らも進化を続ける能力がある」

アレンたちが潜ってきた扉と同じ。 真っ白い扉をこじ開けるかのごとく、“それ”は固定された笑顔を、アレンに対して向けていた。

「……フーン、中々可愛い姿になったものだね。 ボクは、チョット好みじゃないな」

真紅と形容するのが正しいかもしれない赤毛。 マジシヤンのようなシルクハットを被った、ピエロメイクの優男がこちらに対し、喋りかける。

「クロア…… 謹慎が解けたのか？ まさか、そういうわけじゃねえだろ？」

赤毛の“それ”に対し、ルイスが食って掛かる。 が、“それ”は笑顔を崩すことなく、口を開く。

「いいや、『そんな馬鹿げた謹慎如きが俺を縛れると思ったか』そんな訳じゃないよ。 『トイクレクトのデータが欲しくてね』今回は別件さ。 ボクが開発協力をした彼女の体内にあるナノマシンのサンプルが欲しくてね『生きたまま解剖する』。 何、殺しはしないよ、少し血液を取るだけさ。 献血、してくれないかな？ 『やれ』君も、元に戻るかもしれないし」

“それ”の言葉の合間。 “それ”の口の中から、更にもう一つ。ノイズのような声が、時々彼の言葉に混ざる。

「……それは……嘘じゃないだろうな？」

アレンは疑り深く、“それ”に問いかける。

さつきから、どうしても。 “それ”は人間とは思えない、気分の悪くなる。 吐き気を催すような空気を、その身から吐き出し続けている。

「ボクは信用できないかな？ 『四の五の言うな』 それとも、僕の言葉に混ざるこの唸り声が怖いのかい？ 『黙れクロア』 心配要らないよ、これはボクの腹の中の化け物が、騒ぎ立てているだけさ。 ま、信用できなくても力づくでどうにでもなる。 ボクのヒトクイ人種は^{フレデター}キミタチを一瞬で殺すくらい、造作も無いことさ」
平然と、それは息を吸うように。

狂気を滲み出しながら、優しい言葉を吐きかける。 何だ、この男。

「人外が、信用できるわけ無ねエだろ！」

ルイスが再び食って掛かるも、クロアは平然と。 涼しい顔のままでルイスを見据える。

直後、背筋を何か冷たいものが這うような感覚。 そして気付けば、目の前にいたクロアはルイスの背後に静かに。 元より、その場にいたかのように。 静かに、佇んでいた。

『死にたいか？ いい加減黙れよ、殺しちまうぜ？』

クロアの口から直接、ノイズのみが単体で吐き出される。 その言葉の心地悪さは、彼を中心に。 この白い空間をどす黒く染めた。 「よろしい」と言う言葉とともに、その空気は引いたものの。

ルイスとジャックは青い顔で、気分が優れない様子だった。 恐らく、無音も似たような状態だろう。

「……やっぱり駄目か。 『素晴らしい』 トイレクトがボクの

魔力を相殺してくれたらしいね。流石だ、技術提供してよかった」
クロアは笑顔のままで、アレンに歩み寄る。が、次の瞬間。
クロアの背から。腹に向かって銀色の金属光沢を輝かせる板が貫いた。

突然の出来事。その金属光沢のある板が、何なのか。理解するまでに長くはかからなかった。

先端は鋭利に尖り、その貫通力を誇示している。そして、板の両端にある刃が、その危険性をひけらかすように光る。単純な、ナイフ。

それをクロアの背後で握っていたのは、無音だった。

「何をするつもりだ？ 僕の可愛い後輩を、そんな奇妙な施設に連れて行くのは勘弁してくれたまえよ。にーさん」

「無音、居たんだ。相変わらず影が薄すぎて気がつかなかったよ」

腹をナイフが貫通しているにも関わらず。クロアは背後の無音に、屈託の無い笑顔を向ける。と言うより、何だ？

「無音……お前、クロアとは初対面じゃ……」

ルイスに言葉に、クロアソックリの笑顔を向ける。

「そうだぜ？ 言わなかったかな、僕の兄だって」

確かに、ソックリだ。以前に。

クロアはここでもうやく、口の中に溜まった血を吐き出すと、よろめきながら無音から離れた。

「恐ろしいね、その不可視の標識^{インビシブルサイン}は。ボクの欲しい力の一つでもあるんだけど、今回はアレンだ。……の、前に」

クロアの言葉の途中。彼の手の甲にルイス同様の歯車が出現したかと思うと、それは音を立てて回転する！

『俺も不可視の標識^れが欲しい。お前は元々影が薄いんだ、ここで死んだところで気付く奴は居ないだろうぜ？』

彼の中の“なにか”が、ノイズを吐き出したかと思うと次の瞬間。無音の首を右手で握り目、クロアはそれを高々と持ち上げた。

「テムエツ！」

ルイスが、隙だらけのクロアの飛び掛る。が、クロアは平然とそれを蹴り飛ばし、無音に向けて。

その笑顔が、崩れた。見開いた瞳は、まるで獲物を目の前に我慢の聞かない植えた狼のごとく。無音に喰らいつき、視界から外そうとしない。

「……クロアと言ったな。無音を離せよ、協力しねえぞ」

ここでようやく、アレんが口を開く。アレんの言葉に、今しがた見たあの狂気に満ちた視線が嘘だったかのように。再び、あの笑顔のアレんに対して向けた。

「それは困るな『我俣言うな』。ケド、確かにそうだよな。

仲間を殺すのは、ボクも感心できない『仲良しごっこか？ 吐き気がする』。じゃ、ここで交換条件だ。『無音を殺さない代わりにだ』君の両手の指を貰おうか。どうだい、命に対して指十本で済む。『安い。安すぎる代償だろ？』案外、安く済むだろう？」

彼が最初。人間に見えなかった理由がようやく分かった。この中で、飛びぬけて圧倒的な力を有した上で。人間とは思えないその残虐な思考を、知らず知らずに感じ取っていた所為だ。

「……わかつ」

「アレん、君に決定権は無い。ボクを殺せばいいだろ、にーさん。あんたの狙いは不可視の**インビジブル**の**サイン**が最優先だったはずだ。だから、ボクが能力が彼女の研究結果。どちらかが手に入れば……満足するんだろ？」

アレんの言葉を遮るように。苦しさを押さえ込み無音が提案する。

提案に、クロアは笑顔を忘れ、驚いたような顔で、

「へえ、驚いたな。無音、君。彼女が好きなんだ」

ヒトクイ人種と言う名の陰謀（後書き）

§ ネギの気まぐれキャラクター紹介 §

クロア・ディナイアル

性別：不明。 外見、染色体はXYで男

無音の兄であり、人口人類。 吟遊詩人^{ミンストレル}が創ったわけではなく、ど

こからとも無く現れたと言う。

信用に欠け、呼吸をするかのごとく嘘をつく癖があるが、必要な嘘しか突く事はない。

IQは200以上であり、その観察能力は異常。

作者都合：元々は、クロス・ワールドと言う結構ありがちな名前の小説で使ったラスボス。 恐らく、その小説は現在過去ログに流れているか、もしくは相当昔のものだったので探しても出てこないかもしれない。

ちなみに、彼の名前はクロワツサンの頭三文字を取って、語呂を良くしただけ。

考え方が最も作者（私）に近いキャラクターの一人。 で、私としても結構重宝している。

恋愛感情不備と言う名の陰謀

「ボクは、どうもただの戦闘狂として作られたからわからないけどさ。無音、君は……どうやらまだボクより人間に近いらしいねで、どんな気持ちなんだい？ その、“好きになる”って感情は」クロアは楽しげな様子で、無音に問いかけた。が、無音は口を閉ざし、視界が定まらない様子で。それでもなお、クロアを恨めしそうに睨みつけている。

クロアと無音は、恐ろしく対照的だ。

「……この状態だと、喋らせるのは無理か。分かった。キミたちの美しい友情とやらに免じて、この場でボクが暴れるのは止めておこう。さて……アレן。ボクと来てくれるかい？」

クロアは無音を床に置くと、アレןに対してその手を差し伸べる。……鉄くさいような匂いが、彼に染み付いていた。

「ああ、この歯車が怖いのかい？ 大丈夫だよ、『身体能力を増幅するだけの備品だ』これ自体に相手を傷つける力は無い」

その手を無視して、アレןは口を開く。

「分かった。で、お前についていけばいいのか？」

アレןの言葉。それに対し、クロアは呆れた様子で彼女を見る。

「……君さ、自分の外見どうなってるか。自覚は無いのかい？ ボクだってさ、センス無いなりに口調と姿に不自然が無いようにしているのに。女の子になった君はどうやら、一人称を変えることすらしないなんて。ボク並に、君も変な奴だね」

呆れた様子で、クロアは言い放った。だが、もう俺は気にしない。気にしたら負けだ。

「……悪かったわね。で、私はあんたに付いて行けばいいのかしら？ ……で、満足したか。この変態ピエロ」

アレןは顔を真っ赤にして。クロアに対していった。

「中々、可愛いんじゃないかな？ ま、ボクにはそんな事を感じ

取る感情は無いから知らないけど。　じゃ、“これ”に聞いてみるかい？」

クロアは自分の口の中を指差すと、直後。　黒い顔をかたどったような靄が。　彼の口からアレンを睨む。

『俺はテメーの玩具じゃねえぞ』

靄は呆れた様子でそれだけ言い終わるとクロアの口の中に引っ込んだ。

どうやら、先ほどから彼の言葉に混ざっていたノイズのような声の正体。　それが今の靄だったらしい。

「これからしばらくは、こいつに喋らせるつもりは無いよ。　さて、アレン。　ボクと一緒に来てもらおうか」

クロアは何の躊躇も泣くアレンの手を引き、来たときと同じ扉の前に立つと、来た時と同じ。　あのダイアルのついた鍵の番号を回し、扉の鍵を開いた。

ガチャリ。　またその音とともに、扉の向こうにはビルの屋上とは別の景色。　金属の壁や、機械類の数々がアレンの瞳に映る。

クロアはアレン似たいし、扉を潜るように促した。　言われるがまま。　アレンが扉を潜ると、クロアはそれを確認してその扉を閉じた。

「ルイス……無音の奴、死んでねえか？」

クロアがアレンを連れて行った後、ジャックがようやく口を開いた。　それに対し、ルイスは無音に歩み寄ると脈を計る。

そして、首を縦に振った。

「ああ、この様子だと後一時間無くて多分死ぬぞ。　どうする、運ぶか？」

ルイスの問いに、ジャックは答えを出す前に行動に出た。　携帯電話をポケットから取り出すと、数秒後。　メールをどこかに送る

と、倒れている無音の方を担ぎ、扉の鍵を回した。

「じゃ、ルイス。無音が死んだ場合、無音の事探しといってくれよ。俺はまあ、死なせないように手を尽くすつもりだが……多分この様子だと死ぬな。生き残ったとしても、後遺症残すだろうし。後遺症残るなら、無音が“殺せ”って言ってたからな。遺言には従わないと後がメンドイ」

言葉が終わると同時、ジャックは黙って無音を床に投げ捨てた。

「心臓止まった。こりゃ、死んだわ」

それに対し、ルイスが面倒くさそうに頭を掻く。

「じゃ、今回も俺が探しに行つて来るわ」

*** **

クロアに言われるがまま、扉を潜つてから。薬品の匂いが鼻につく。

刺激的な匂いもあれば、気分の和むような匂い。浮遊感をもたらすようなものまであった。何だか、変な気分だ。

「さて、じゃあその椅子に座つて。悪いね、研究員が今ナノマシンの後始末でてんでこ舞でボク以外。手の空いているメンバーがいないんだ」

そう言うや否や。クロアは壁のフックに帽子を掛け、白衣を羽織る。

「格好だけさ」

そんなことを言いつつも、手早くアレンの向かいに椅子を引くと、自分もそこに座った。そして、手を伸ばして壁の取っ手を引いた。壁に収納されていた器具が引田さて、クロアの両脇に二つ。同じセットが並べられた。

「さて、腕出して。心配し無くていいよ、これは基本的に血を採るための注射だから」

クロアは器具の中をあさると、一本の注射針を手に取り、その鋭

利な先端をちらつかせる。注射程度の事であり、元殺し屋であれば注射針を刺す以上の傷を負うことだってざらにある。

が、アレンはそれを見た途端。顔を真っ赤にして椅子を立ち上がり、クロアから遠ざかった。それを見て、クロアは楽しげに笑う。

「ハハハ、成程ね。トイクレクトの精神似関与する部分か。自分から、傷を負うことを避ける。つまり、アレン。君にはこのただの注射針が毒針に見えて仕方ないわけだ」

器具の山を押しのと、クロアはただの白紙にそれを箇条書きで書き殴った。

直後、デスクの上にあったパソコンがメール受信の表示を示した。それを見て、クロアは笑っている。

そんなことをしている間も、アレンは内からこみ上げてくる恐怖にされるがまま。涙を浮かべて、クロアを恐ろしい何かのように、壁に張り付いて見ている。

それを見ても、クロアは相変わらず笑顔のままだ。

「そんな怖がらなくなたっていいじゃないか。採血は諦めたよ、ほら」

クロアは注射針を器具の山に放り込むと、アレンの体の震えは止まった。だが、どうも目に溜まった涙だけは引っ込めようが無い。

「……ホント？」

弱い小動物のような様子で、アレンは恐る恐るクロアに問う。

それに対し、クロアは相変わらず笑顔のままだ。

「本当だよ」

言葉の合間。器具の山からクロアはメスを手に取った。そして次の瞬間。

「ほら」

そんな優しい声とともに、アレンの右手に小さな痛みが走る。見れば、小さな切り傷が。

まるで、鋭利な刃物で謎ッ雇うな切り口である。そして、その

鋭利な刃物は、クロアがその手に握っていた。さつき拾い上げたメスに、アレンのものと思われる血液が大量に付着している。

「ね、一瞬だったろ？」

「ヒドイよ、採血は諦めたって……」

アレンの言葉に対し、クロアは疑問符を浮かべた。

「さて？ 何のことやら」

人体医療研究という名の陰謀

目が覚めた。

何だか、モノを見るのは久しぶりな気がする。

白い天井が、彼女の蒼い瞳に映る。長い金髪をベッドに散らし、腕には点滴を繋げられ、人の声が部屋の外からする。

ああ、やっぱり。あの体、死んじゃったか……また造るなら、何ヶ月かかるかな？

結構金かけて、転移先指定の計算までして転移したのに。何だか、もったいない事をしたような気がする。

「おい、誰か居ない？」

病室の外に向かつて、その人物は声を張り上げる。

すると、個室の外から慌しく白衣の看護婦が室内へと駆け込んだ。まるで、その声を上げた人物が死んでいたのに蘇りでもしたかのような。

それほどまでに、慌てた様子で。

「先生、リーズさんが目を覚ましました！ 意識もはつきりしています！」

入ってきた看護婦が、彼女の腕を持ち上げ、脈を計りながら叫ぶ。駄目だろ、そんな患者の横で騒いだら。

様子からして、重症患者だし。と言うより、あの声は……。

「俺、今度は女になったのか。失敗したな」

消え入りそうな声が、彼女の口から吐き出された。自分の現状

把握の直後、彼女の脳は恐ろしい速さで思考を組上げ、構築した。

確か、俺はアレンの様子を見るんで付いて行っただけ？　で、
ホワイトボックス
白い箱でにーさんが来て。アレン連れて行こうって言うんで色々
無茶言っただから刺したんだっけ。

で、返り討ちにあってこの有様か。

「……情けないな、助けようとして殺されるなんて」

とある国立病院、五階の個室で。彼女、音無　無音は意識を取り戻した。

「先生、先生！」

看護師が慌てた様子で、医師をその部屋に連れてきたときには、既に彼女の姿は無かった。

ただ、そこにあっただのは“誰か”が寝ている、彼女の寝ていたベッドだけだった。

「さーて、ここは……どこかな？」

それにしても、殺されても死なない力。脳死後とはいえ、他人の身体を勝手に貰うのは相変わらず気が引ける。

病室の更衣室で、彼女はジーンズとジャケットを羽織ると、外へと踏み出した。

「……アリガトな、リーズ・ラッド。君の服、僕好みだ」

病院内を歩き回り、一階の案内板の前で彼女は止まった。そしてその視線の先にあった文字“国立医療研究所”と言う、たった七文字。

それが彼女の頭に焼きつくように、大きな衝撃を与えた。その理由は、至って簡単。

「アレンが……地下二階にいるのか。助けに行くべきかな」
そんな独り言の直後。彼女は直ぐにそれを行動に移す。

エレベーターに向かったかと思うと、直ぐにその横。非常用階段で地下へと駆け下りる。コーン、コーンと言う規則正しく靴を踏み鳴らす音が、コンクリートの壁に乱反射し、中々騒がしいが、そんなことを気にする暇など無い。

研究室の連中は、人の命を玩具程度にしか考えない節がある。

それは、無音が最もよく知っていた。

階段を駆け抜け、聞こえてくるクロアのからかうような声。 あ

あ、確かにここであってたらしい。

扉をゆっくり開くと、クロアは無音を見た。

「……なんだ、結局死んじやったのか。生きてると思ったんだけだな。 ま、無音がまた、可愛い妹になったってことで良いか」

クロアは落ち着き払って、その笑顔を無音に向ける。

「で、君に一人に何が出来るのさ？ 『殺された軟弱ヤローが』さつき、ボクに絞め殺された奴がさ」

「僕を増やすつもりかい？ ふざけるなよ、死なない人間を増やして、何が楽しいんだ？ 死なないだけでどれだけ苦しむか、知ってる癖に……！」

クロアの言葉に、無音が食って掛かる。 どうやら、相当深いところ^{シッカー・テラトマ}にこの二人の因縁はあるらしい。

が、クロアはそんな因縁など知った事でもないと言う様子で、口を開く。

「何だ、病原生物は不^{シッカー・テラトマ}服かい？ 君は生きて高々五十年程度だろう、『餓鬼が』ボクの六分の一程度。それで苦しんでいるようだったら、君も弱いね。 だからボクに『俺にすら』……勝てないんだよ」

クロアは躊躇無く。 器具の山からメスを拾い上げると無音にそれを投げナイフの要領で投げつける。 が、無音は今しがた。 天敵を繋げられていたからだとは思えない駆動でそれを避けると、瞬時に振り返りその手でメスを掴み取った。

「どうやら、危険な人間の身体に移れたらしい。 リーズ、君には感謝するよ」

小さく呟くと、メスを握り、クロアへ向かう！　が、クロアは平然と椅子に座ったまま飛び上がると、空中で一回転を決めてパソコンを踏み潰しデスクの上に。

パソコンがショートする事もいとわずに、まるで軽業師のように。無音の攻撃を椅子に座ったまま避けていく。

「確かに中々、スピードが上がったらしいじゃないか。　繊細さもある。　ケド、僕には遠く及ばないぜ『雑魚が』、それでボクに牙を剥くのかい？」

ヘラヘラと。　笑顔ではなく、その笑は狂気へと変わる。

「ま、今回は殺しはしないさ。　アレンの血液も取れたんだ、帰っていいよ。　……　って、言いたい所なんだけどさ。　気が変わった。

無音、君の血液サンプルも……ホシイ」

人体医療研究という名の陰謀（後書き）

§ネギの気まぐれ解説§

そんなことやる暇があるなら本筋書けとか言わないでください
私も、行き詰るのですよ…… or z

能力者と呼ばれる人たちはレベルがいくつであろうとも、

危険度がどれだけ高かろうとも、持っている能力は基本一つです
元々、素となる魔力を吐き出すときの副産物ですから

そんなにいくつも要りませんし

ちなみにこの魔力、溜め込みすぎるとその人間は消えます

能力の使い過ぎでも、消えます

では、この辺で

無音のセカンド能力

シッカー・テラトーマ
病原生物

単純に、転生能力とでもいうべき力であり、無音の肉体が破壊され
ようともランダムで。

脳死した人間にその意識を飛ばし、記憶や意識を逃がす力。

ただ、肉体が死んだ後に発動するため、無音にはどこに行くか
どんな身体に転生するかは不明

一応、規則性としては

・二十代前半

・治療を必要としない健康的な体

・比較的近距離

・白髪・碧眼

の四つである。

今回のように、男女無視での転生となるために

好きになる相手の好みは男寄りのようだが、無音の精神的な性別は

不明。

どういわけか無音に転生された身体は三十歳を迎えると同時に
寿命で死んでしまい、無音は再び別の身体へ転生する
ちなみに、無音のような戦闘専門に造られた生き物にはセカンド以
外に

サード、ラストと四つまで能力を持っている者が多い。

ホムンクルスと言う名の陰謀

「……血液サンプル？ 前も同じこと言ってたね」

落ち着いた様子で、アレンを扉を潜らせ逃がすと直後。 無音は扉を潜らずクロアに向かう。

「そうだよ、ほら。 ……注射」

器具の山から注射針を持ち上げると、クロアは有無を言わず。先ほどとは打って変わって、文字通り。 目にも留まらぬ速さで、無音のマウントを取った。

足で両腕を押さえつけ、まるで強姦しているかのような姿勢である事も気に留めず。 注射針を、クロアは無音の腕に突き刺した。

「一応、こんな事して悪いとは思ってるんだ。 こんなこととして許してもらうつもりは無いけどさ。 無音、君にも一応喋っておくべきかな？ 知ってると思うけど、ボクが……人間モドキだってこと」

狂気が失せ、クロアは笑顔を取り戻した。 感情の無い笑顔を浮かべるその頬を、一筋の水滴が伝う

*** **

扉を潜ろうとしたルイスと、どうやらアレンは鉢合わせたらしい。扉を押したのが悪かった。

顔を撫でているルイスを見ると恐らくは。 取っ手に手を掛けている状態でアレンが扉を開いたのだらう。 顔面が赤く、充血している。 ついでに、鼻血も。

一応、事の顛末は話しておくべきか。

「クロアが採血を……か。 なるほど、奴らしいな」

ルイスが納得した様子で、鼻にティッシュを詰めながら呟いた。
アレンの説明だけで、どうやらルイスは大体の内容を把握したらしいのだが、ジャックは疑問符を浮かべている。

「オイオイ、知ってる奴だけで話を進めるなよ。俺はクロアのこと知らねえし、何より聞いたのは道化って事と名前だけ。あれ、一体なんだ？……本当に、あんなのが人間か？」

ジャックの問いは、最もだった。

それに対し、ルイスが口を開く。 いや、人間ではない……と。

“それ”は始め、フラスコの中の小人だった。一人の科学者が、“それ”に身体を与えたのが、始まりだ。

ホムンクルス。全てを知る、錬金術のもたらす人造人間であり、賢者の石と言う形態を持つてそれはそこにあった。無機物として意識を持ち、脳波を計測できる存在。

それから取り出した情報で、そのイカレ学者がDNAを組み、身体を培養した。培養過程で、男女の形質両方を有したが、最終的に外見は男。染色体はXX、YYに分かれ、二種類の細胞を持ち、男女は不明。一応はXYとして認識されたい。その肉体の脳に、賢者の石を埋め込むことで、それは目を覚ました。

人造人間が、あの研究所で作られたらしい。元々あった、賢者の石。それに関してはノータッチだったが、俺の知っている情報はもう少し先だ。

ルイスは神妙な様子で、静かに口を開いた。

「奴、クロア・ディナイアルは……ホムンクルス人造人間の殺し方を探しているらしい」

*** **

「ボクは……人間モドキとしての死に方を探しているんだ。無音、君は病原生物を剥がして殺せば死ぬ。ケド、ボクは何度殺されても、その傷がふさがつてもう一度。起き上がってきちゃうんだよ。『見る、お前の刺した傷が……もう無い』」

ノイズが、クロアの腹部を指差し、そう告げた。

「ボクは、キミたち人間とは違う。眼球はただの飾りだし、脳だつてあるかないか分からない。吹っ飛ばされても、賢者の石を破壊しない限り。ボクは死なないけど、ボク自身。賢者の石を壊す術がなくてね」

クロアは自分の頭蓋骨を人差し指でつつく。

「ボクの本体である賢者の石。ボクの力じゃどうも、壊せないらしいんだ。だから、ボクを殺せる強い奴を作る研究をしてる」頭をつついていた指が、今度は壁に並べられた緑色の液体の入った機械に向けられた。なにやら、中で人のような形の物体が浮き沈みを繰り返している。

突如、それはその真紅の瞳を、こちらへ向けた。

僕の存在に気付いてる？ まさか……ね。

「僕を睨んでるけど、アレはなんだい？」

無音の問いに、クロアは上機嫌で口を開く。「良くぞ聞いてく

れました」とても言いたげに。

「白ノ棺。
ホワイトカフィン

……多分、彼女は忘れてると思うけど、ボクは彼女が男のときに一度会ってるんだ。……さて、血は採れたし、帰っ

ていいよ。送ろうか？」

注射器の針を無音の腕から引き抜くと机の上にそれを放り投げた。そして、クロアはあのダイアルのついた鍵を扉に差し込んだ。

ガチャリ。と言う、音が小さく鳴った。

人間外生命体と言う名の陰謀（前書き）

何だろう、クロアをもう少し奇妙に書きたかった……
根は良い子だしな、彼

性格に関しては楽だけど、行動が難しい

人間外生命体と言う名の陰謀

ばごんっ。

そんな鈍い音とともに、勢いよくルイスの顔面に再び扉が叩きつけられた。　どうやら、扉の向こうからあの鍵を使ったらしく、通じていた先は今しがた居たあの怪しげな研究室だった。

そして、扉を押し開けた人物。　それは……先ほど狂気を見せた。クロア・ディナイアル、本人だった。　その後ろに、彼が無音と呼んだ少女が、佇んでいた。

アレンが視線を向けるや否や。　彼女はあさつてのほうを向いた。それを見て、ルイス、ジャックと続く。　当然のように、彼女は視線をはずし、三人の認識から景色へと溶け込んだ。

間違いない、この反応は無音だ。

「……どういう意思変わりだ？　クロア」

ルイスが顔を抑えている横で、ジャックが怒鳴る。　が、クロアは涼しい顔だ。

「いや、キミたち。　ボクの事、誤解しすぎだぜ？　ボクをただの暴君と一緒にしないでほしいな。　ボクだって目的があつて動いてるんだ、キミたち人間と同じでね。　ボクが関与した知恵戦争でウィズテムボクが数万の兵士を一瞬で屠ったとか、そんな馬鹿げた話はあるけどさ。　ま、まだ一人しか人間は殺したことは無いよ。　アレは皆廃人になっただけで死んでなかったし、一人もあそこじゃ死んでない」

目の前で突っ伏している無音の死体から引き剥がしたナイフを後ろにいる無音に投げ渡すと、クロアは扉の枠を踏みつけた。

「ま、キミたちも三、四百年くらい生き続ければ分かると思うよ。　あ、そうそう。　しばらくしたら、アレンももう少し可愛くなると思うよ。　……じゃーねー」

それだけ言い残すと、クロアはその飢えた猛獣のような瞳を細め、扉に消えた。

「……本当に、無音か？」

不意に、ジャックが目の中の空間に問う。まあ、突然姿形、性別まで変わればそう思うが。あの反応は流石に無音だろうよ……。そんな考えで、

「こんな奇妙な視線恐怖症患者が無音じゃないわけがねエだろ。ま、探しに行く手間が省けたな……。明日の任務は、予定通り行けるか？ 休暇取る事も考えた方がいいぞ」

「……いいよ。身長とスリーサイズ分かってるし、服は適当に見繕って着れる。それと、ボクはこっちだよ」

ルイスの背後から。無音はルイスの頬をつねり、横に伸ばした。痛みがしながら、ルイスはその手を叩き落とそうとするが、その前に無音はその手を離れた。

何だろう、ルイスの顔が真赤になってる。

「……痛くないの？」

思わずアレンはルイスに問う。その問いに、ルイスは黙って首を立てに振った。

*** ** *

「中々、人間と言うのも力をつけてきたね。流石、神の作った泥人形……といった所か」

長い金髪を揺らし、彼女は薄暗い廊下を闊歩する。壁には千切れたケーブル、ショートした配線などが垂れ下がっているにもかかわらず。

彼女はそれをあろうことか素手で握り、避けると何事も無いかの

ように突き進んだ。

ケーブルに流れている電流は、五百キロボルト。言わずとも、人間が触れれば感電死する。それどころか、一瞬にして消し炭へ変わるだろう。

だが、彼女はそんなことすら気にも留めず。その廊下を歩み続ける。

しかし、廊下と言う人工物には壁があるのだ。階段をゆっくりと踏みしめ、上ると、そこには小さな扉が。彼女のその深く青い瞳が、鍵穴を見た。

鍵が……掛かっている。

「……詠唱は好きじゃないな。【我が行く先を閉ざす者よ。

我に道を譲れ】」

彼女の一言に、扉の鍵は恐れをなしたかのように。独りでに開き、彼女はノブを握る。

そして……扉を開いた直後。

「撃てエッ！」

男の一言。彼女の視界に映る、マシンガンを構える白衣の集団。……この施設の研究員だ。

成されるがまま。彼女は迫り来る銃弾の衝撃に、その華奢な身体を小刻みに揺らす。弾幕が晴れたとき、彼女は廊下に頭を向け、仰向けに倒れていた。

顔には、無数の弾痕が残されている。

……死んだか？

「……痛い」

甘かった。そういつているかのように、マシンガンを構えた白衣の集団は頭を抱えた。

有り得ない。脳天どころか、全身に銃弾を浴びせた。ペイン
ト弾などというちやちな物ではない。殺傷力のある、高威力弾だ。
それなのに……彼女は平然と起き上がって見せた。ポットから
ハンカチを取り出すと、傷口を拭う。

それだけで、傷口は全て跡形も無く消えてしまう。

「……これで、最後の足掻きも終わり？ マシンガンを使うところを見ると、どうやらこの研究施設には危険度の高い能力者はいないようだね」

「……化け物め！」

白衣の集団の中の一人が、叫んだ。 ナイフを握り、彼女に対し、突き進む！

が、彼女はそれに対し、右手を突き出すとその男に飛び切りの笑顔に向けた。

「そう、私は化け物だ。君のその勇氣だけは認めよう」

俗に言う、凸ピン。それがその男の、頭蓋骨を撃ち碎いた。

それと同時に、突き出した手とは逆。左手で自分のコートのポケットを漁ると、彼女はビターと印刷された包みの板チョコレートを取り出し、その角をかじった。

「さて、命乞いするなら今のうちだよ。命乞いしても、生かしておくつもりは無いけどね」

人間外生命体と言う名の陰謀（後書き）

§ ネギの気まぐれ解説 §

あの鍵

正式名称【あの鍵】

はい、名称は手抜きです。

形状としては、持ち手にダイヤル式の錠。そこから鍵特有のあの棒が生えている状態

我ながら、ふわふわした説明ですが。 そんなところです

仕組みとしては、特定の形状の扉から、特定の形状の扉をつなげる効力を有しまして

ダイヤルの数字によって繋がる先を帰られるという便利アイテムです
考案理由は、簡単。

私の描写能力の無さを補うためとか、そんな馬鹿げた理由です

まあ、この鍵は終始よく出るアイテムになりそう

襲撃予定消失と言う名の陰謀

「いやー、無理でしょ。明日君達が攻め落とすはずだった施設、壊滅したよ」

白い空間の中、それは無駄に目立つ。 いや、この空間でなくとも、その毒々しい濃いピンク色の頭髮は嫌でも目立つ。

「ああ、驚かせて悪いな。 カフィン、君とはまだ初対面だったね」

ピンク色の彼は、その緑色の瞳をアレンに向けた。 手に持っているゲーム機や背格好から、まだ十代前半の餓鬼なのだが……何だ、この無音を超える奇妙な少年は……。

「君、失礼な事考えてるだろ」

そんなことを言いながら、彼は手に持っていた携帯ゲーム機の電源を切った。

「ま、いいや。 ……むう。 なかなか、能力高いな」

ついで彼は、アレンの顔を品定めするかのように眺め、その視線は徐々に下に下がり、足元まで。 機械でスキャンしているかのような違和感と、なんだかよく分からない怒りがこみ上げてくる。

……。

「……何じろじろ見てるんだよ。 脱げとか言わないよな？」

「言うわけ無いだろ？ 君は可愛いけど、僕のタイプじゃないな。 アレン・ブラックウッド。」

身体年齢 16、レベル 98

攻撃力 15000 ↓ 98000

防御力 12500 ↓ 13000

スピード 12000 ↓ 24000

スタミナ 8800 ↓ ∞

技量 350 ↓ 480

……凄いね。隊長さん並に強い。ナノマシンでスタミナが無
限とあるのは特に凄いよ。ケド、他の値が接近戦向きじゃないの
がもったいない。疲労の蓄積が激しいね、もうそろそろ急激な睡
魔が君を襲うはずだよ」

彼は上の空で、意味の分からない数字を並べていく。それを聞
いて、ルイスは驚いた様子で、ジャックは予想通りといった様子で
それを聞いていた。

「何だ、そのレベル何とかって」

「スペクターの能力だ。中々、使えるんだぜ？ ジャックは元
々戦闘訓練向きだったしな、測定係じゃない。つーか、今までお
前、どこに居たんだ？」

ルイスが、スペクターに対して問う。が、スペクターは半開き
の目で、呆れたような視線を送った。

「君が、第八支部の測定に行けて上からの命令を僕に伝えたん
じゃなかったっけ？ それでさっきまで、数値化してたんだけどあ
そこは駄目だね。非戦闘員ばかりだから、技量が高いのばっか
りで、技量があっても体が付いて行かない連中ばかりだったよ」
詰まらなさそうに、彼はため息をついた。

「やっぱり、強い人を測定するのが楽しいな。で、明日壊滅さ
せるはずだった施設さ……なんか壊滅したんだってよ。監視カメ
ラに映ってた映像は、金髪の女の子だと思っただけ……」

「で、戦闘能力は？」

ジャックの問いに、スペクターは「驚くなよ」という前置きの後、
口を開いた。

「アリソン・F o r p ・セイファート。どうやら、彼女の名前
はその文明ごとに違うらしい。」

身体年齢 18、レベル 2

攻撃力 280兆

防御力 ゼロ

スピード 320兆

スタミナ 上限無し

技量 560兆

魔力総量 上限無し

……確かに、カメラに映ってたのはほんの一部だけださ。僕の能力の正確さは、僕自身が一番よく知ってるし、君達も知ってると思う。髪の毛一本で正確な測定が可能なんだ。なのに……兆つてなんだ？ ……あれは、人間じゃないよ。クロアですら、攻撃力が五十万だったのに。そのクロアが、まるで赤ん坊だ。チー
ト使っても……あり得ないよ」

「……文字通り、化け物ってわけか。で、その防御ゼロってのは？」

ジャックが怯むことなく口を開いた。特に気にすべきこともない、むしろ納得したと言った様子で。

「……なんでそんなに落ち着いてられるんだ？ 僕だって最初見たときは何も喋れなくなっただのに。 防御に関しては、ハッキリしないけどもう一度見てその方向で解析してみるよ」

さつき電源を切った携帯ゲーム機の電源を入れると、動画の再生画面を表示した。

曲がり角を、手前から。 長い金髪の女が突き進んでいく。 彼女は右に曲がって、ものの数秒で動画は終わった。

「防御する必要がなくて退化したらしいね。 種族は……悪魔、階級は侯爵、種類は不死鳥？ ……悪魔って言うのも、はじめて見た。 どうやって倒すつもり？ 限界までレベル上げて究極装備のゲーム主人公を使っても、無理だよ。 現実問題、この数値になると大陸丸々一個を吹き飛ばせる核弾頭とほぼ同レベルの破壊力を持つてる」

「……倒す必要はねえよ。 アリソンの馬鹿だってハッキリした

んだ、一個だけ。守っていればあっちから何かすることは無い。

協力してくれる事も、無いけどな」

ジャックは呆れた様子で、スペクターをなだめる。が、スペクターはジャックに対し、ゆっくりと言葉を吐き出した。

「……なんでそう言える？」

が、それに対するジャックの答えは一つ。それも、ずいぶんと

「俺が、知恵戦争で相手取った最後の相手。ウイステムそれがコイツで、俺

と面識があるからな。多分、クロアも知っているとと思うぞ。彼女は

は、人間に魔力……能力を与えた張本人だ。ザ・フューチャーそうだな、この前見

つかったってテレビが騒いでた海底遺跡。未来遺跡に引き籠もつ

て紅茶すすってるだけの奴だったし。こっちから攻撃するか、彼

女の中で定められた能力の使用制限に引っかかなければ攻撃してくる事はない」

ジャックの言葉の直後、アレンは意識を失い、その場に倒れこんだ。

「……このタイミングで倒れると、さっきのスペクターが言ってたことか、ショックで倒れたのかわからねエな……」

ルイスが呆れたように、アレンを抱き上げた。それも、お姫様ダッコで。

「……害が無いなら、彼女の対策を考えなくて良いの？」

スペクターの問いに、ジャックは黙って頷いた。

「ルイス、これ。アレンに毎日書くように言っておいてよ、日記つけてくれると、健康診断の手間が省ける」

スペクターはアレンを抱き上げたルイスに、分厚い表紙のノートを一冊投げ渡した。ルイスはそれをつま先で蹴り上げるとアレンの胸の上に落とす。

「あー、分かった。目が覚めたら言っとく」

襲撃予定消失と言う名の陰謀（後書き）

数値化能力……案外、分かりにくい現状を整理するのに向いてたりします

基本、この手のキャラは奇抜な姿で携帯ゲーム機常備。そして少年が基本

そして……シヨタ！（私の中で）そこは譲れない。

あ、ごめんスペクター、轢かないで！ ロードローラー乗らないで！
男だね、漢なんだね、わかったから↑

何だかノリ突っ込みの多い私……騒がしいだけだよなー……

スペクター君登場

ちなみに、設定ではユダヤ人

アレンはアメリカ人

無音は日本人

ルイスはスペイン人とアメリカ人のハーフ

ジャックに関しては不明

アリソンはスペイン人

ユリアはスウェーデンとか、そっちの方

クロアやアレン、アリソンの姪に関しては創作だったりしてます

本日は三度更新予定

お姫様抱つこと言う名の陰謀

何だか、気持ちが良い。心地良い。

アレンは、うつすらそのまぶたを開く。視界に入ったのは、ルイスだ。

どうも、さつきスペクターが言っていた疲労が蓄積した結果らしい。ナノマシンの効力か？ 疲労を蓄積して、一度に回復するか。そんなところだろう。

「……イス？」

「俺は椅子じゃねえ」

当然のごとく、ルイスはアレンに突っ込みを入れる。

ルイスは抱きかかえていたアレンをベッドに降ろすと、布団を掛けた。そして、部屋のノブを握る。

「……待つてよ。一人にしないで」

半分、寝言が混ざっていたかもしれない。多分、その大部分が意識的だったのだろう。アレンはそれを認めようとはしなかった。

今しがた、抱き上げられていたせいか、アレンは赤面して、ルイスのほうを見ようとはしない。

男相手に恋愛感情？ ホモか。

そんな思考とは裏腹に、もともとの腕力をなくした非力さが、彼女の恐怖心を煽る。

もし、敵に伸されたら？ 慰み者になるのがオチじゃないか。

「どうした、気分が悪いか？ 大体そうだ。クロアの魔力に当てられれば、基本的に寝込むもんだ。俺だって、今も吐き気がすれば、能力も使えねえ。心身の状態が不安定だからな。クロアと面と向かって話すだけで、いつ殺されるか分かったもんじゃねえ」
適当な椅子を手繰り寄せると、ルイスはそれに腰掛けた。

「クロアと違ってよ、この詩人を束ねてる黒薙童子ってやつは…

…温厚派だよ。俺らの頼れるボスだ。ただ、日の光を浴びるだけで大火傷する、致命的な弱点もあるけどな」

ルイスは本棚から、適当な本を一冊手に取った。生きる屍、ゾンビなどと書かれた表紙。銀の弾丸の印刷が目立つ。

「ボスは、ゾンビだ。詩人には、約二万人のメンバーがいる。

その仲の誰でも、あいつの部屋に出入りできて、その全員が銀の弾丸を持っていれば。ボスがどんな奴であれ、死ぬだろ」

本を本棚に戻すと、ルイスは言葉を続ける。

「けどな、あいつは殺されねえ。メンバー全員、自分で選んでスカウトしてきた奴だからな。お前だってそうだぜ？ お前の行動を見たあいつが“学生時代の俺にソックリだ”って言うもんだから、無音が派遣された。で、話を戻すが……^{ボス}童子とクロアは……友人関係にある。クロアがここのメンバーを殺せば、童子がクロアを殺しちゃう」

語りに落ちていたのか、アレンが相当な早さだったのか。恐らくは、後者だろう。

ルイスに対し、彼女が虚ろな瞳のまま抱きついたのだ。それに対し、ルイスは反応方法を失った。数秒間のフリーズの後、ルイスは再起動するとアレンはその行動を進めている。

彼女の右腕の小さな切り傷に、ルイスの目が行った。

「あの野郎……アレンになんか怪しい薬盛りやがったな」

*** ** *

「相変わらず、可愛いな。早くボクを、殺してくれよ」

緑色の液体の中で浮き沈みする白髪の彼女に対し、クロアは上機嫌でそう呟いた。

彼女はその真紅の瞳をクロアに向けると、そのガラス管の中で暴れまわる。だが、相当な強度なのか、ガラス管は日々は愚か。音すら通さない。

「んー、無駄無駄。ボクの魔力をつぎ込んで造ったんだ。君の力じゃ、絶対に壊せない」

「私の力はどうか？」

突然の来客。そして、その人物に、クロアは言葉を失った。

それはまるで、御伽噺のピーターパンに出てくるフック船長のような服装で、そのくせ可愛らしい人形のように。その長い髪を散らし、深く青い瞳で、クロアを見据えていた。

「……アリソン」

しばらくの沈黙の後、クロアは口を開く。が、彼女はクロア同様、作り笑いを浮かべていた。

最も、その作り笑いは、クロアの笑顔以上に、可愛らしくも不気味だ。

「……何か用かな？ 不死鳥が、わざわざボクの研究室を訪れるなんて。ここに来た三十年間で一番ビックリしたよ」

クロアの言葉に、彼女は耳を貸そうとはしない。彼女はふいに、今しがたクロアの眺めていたガラス管に目をやった。

「これは何だ？」

ホワイトカフィン

「検体名：白ノ棺だよ。今のところ、ボクの死に最も近い検体さ。ま、結局君に掛かれば、ボク一人を殺すくらい造作も無いだろうケドね」

相変わらず、笑顔のままクロアは話を続ける。

「で、君は何をしに来たんだい？ ボクの罪なら、償っただろう？」

「いや、君がまた禁忌を犯しそうな状態になってるみたいだからね。ま、この状態じゃどう転んでも禁忌を犯すさ。と言うわけで、私の配下の一人を見張りに付けようと思ってね」

アリソンは鍵も使わず扉のノブを捻ると、なにやら石室のような空間とその扉とつながれた。無理に繋げたのか、枠に小さな隙間が

出来ている。

「お呼び……でしょうか？」

「んー。君もアリソンと同じで中々可愛いね」

クロアは彼女に、いつもの笑顔を向けた。それを見てか、彼女は怯えたようにアリソンの背後に隠れる。が、アリソンはそんな彼女をその怪力でクロアの前に放り出した。長い緑色の髪を、リボンで雁字搦めになっている辺り、不器用だと思わせる。色白で、細長い耳……。

「へえ。不死鳥の配下って言うのも色々いるんだね。君、エルフじゃないか。それも……ミストルティンの部族だね、魔界に堕ちたとき以来だ」

クロアの言葉が的を射ていたのか、彼女はもう一度アリソンの背後に逃げ込んだ。だが、アリソンは面倒くさそうに再び彼女をクロアの前に突き出した。

「メイシー・リベラ。この子が、君を監視するよ。魔界でも、エルフって種族は可愛いから、捕まって奴隷にされやすくてね。

中世辺りまで、エルフの居た時代は、人間もよく捕まえて奴隷にしていただろう？ 私が、エルフと契約したんだ。“私の所有物という肩書きを背負ってくれば、私が把握しているだけの奴隷を前解放する”ってね。この子は、元奴隷だから、対人恐怖症で視線恐怖症……怖がりなんだよ。優しくしてあげてくれたまえ」

お姫様抱っこと言う名の陰謀（後書き）

処女作で宿娘やらされてた（ここ重要）メイシーが登場
明るいキャラだったのに、何があっただろう……

一応、能力は無く、魔術を得意とする子です

あまりに久々登場のため、私も彼女の性格を忘れ気味
いいのか作者、こんな事で……

アリソンはまあ、第三勢力。

行動原理は彼女の脳の中なので、特にキャラ紹介するつもりは無い
です

あえてするのであれば

好物がチョコレートとミルクティー

嫌いなものがキムチと害虫くらいですかね

出鱈目に強いくせに、ゴキブリが出た途端

泣き叫びながら近くの男の子に飛びつきます（笑）

媚薬服用注意と言う名の陰謀

「あ……」

「どうした、クロア？　メイシーと面識でもあったか？」

机の上のビンを見て、クロアは声を上げた。　青白い半透明のジェルが入れたビンは、その薄暗い室内で僅かに発光しているのが確認できる。

「いや、アレンの採血の時さ。　ボクがふざけて媚薬を盛ったんだけど……　どうも、これ。　ボクの手違いで、遅効性なのは良いんだけど、ワンランク強力な奴使っちゃったらしくてさ。　結局どうなったんだろ？　……見てみたいな」

クロアの言葉に、アリソンは呆れてため息をついた。

「君は、全く。　いい加減四百歳になるくせに、いつまでも子供みたいな奴だな。　……　薬盛るあたり、子供より性質が悪いか」

*** ** *

ほぼそれと同時刻。　アレンの様子を見に来た無音は、言葉を失った。　アレンに与えられた準備室の扉を開いた途端、彼女の目に映ったもの。

それは紛れもなく、ルイスに襲い掛かるアレンだったからである。ルイスはアレンを遠ざけようとするが、どうもアレンはその焦点の合わない視線をルイスに向けている。

どうやら、扉が開いた事で無音の存在に気がついたらしい。　ルイスは無音のほうを向いた。　それと同時、ルイスの隙を突き、アレンはルイスの指を咥えた。

そしてそこから、思考停止したルイスのズボンのベルトに手を掛け、脱がせにかかった所で。　ルイスは再起動し、アレンを引き剥がした。

「無音か？」

「……失礼しました」

ばたんっ。

そんな音とともに、無音は扉を閉じた。

「待て無音！ コノヤロー！」

ルイスの悲痛な叫びが、廊下に木霊する。

流石に、女に免疫の無い彼を助けてやらないのは可愛そうだ。

再び、扉を開き、いざ室内へ。直後。

視界を、何かが覆った。誰かが僕の頭を撫でてる。

「……アレン？」

「……ムオン〜」

そしてその刹那。無音の横を誰かが素通りした。恐らく、ル

イスが隙を突いて逃げたのだろう。無音の背後で、扉のしまる音

がした。

……野郎、戸を閉めて自分だけ避難しやがった。

顔に当たってるのは……胸か。息苦しい、

「離してよ」

不動とでも言うべきか。無音の冷めた言葉も、アレンには届か

ない。

そもそも何で……こうなってる？

「……にーさんの悪戯か。全く、趣味が悪いな」

悪戯だとすれば、多分採血したとき。注射針に、媚薬かなにかを塗っていたのだろう。

出来れば、能力は使いたくないのだが……アレンがキスを求めてくるわけで。仕方なく、無音はそれに応じた。もちろん、治療を前提に。それに、この体でなければ、この能力も使えないわけ

で。

まあ、僕に相手の異常状態を移す能力だけど、今回は媚薬だし、毒じゃない。僕がこの状態になるとしても、アレンだったら簡単に取り押さえてくれるだろう。

女版、サード能力【アビリティ口移動】……発動。

キスと同時に、アレンのうつろな瞳が閉じたかと思うと、彼女はうつ伏せに、ベッドへ倒れこんだ。

アレンはベッドに倒れたまま、気持ち良さそうに寝息を立てている。こうしてみれば、ただの女の子だ。

これが……あのカフィン……か。俄にわかには信じられないが、戦闘能力は本物だしな。

「ナノマシンの力。体どころか精神すら……男一人を女にするくらい、造作も無いのか。……詩人こゝしの研究室で、解毒剤が造れないか相談すべきか……？　まずは、媚薬これを解毒すべきだな、遅効性で助かった」

彼がもし、元に戻ったらどれくらい強いのだろうか？　考えるだけで、寒気がする。

媚薬服用注意と言っ名の陰謀（後書き）

なんだか、能力名にめだかボックスが入ってきたような気がする
リップ＝□

ドラッグ＝薬・移動（PC用語）

敵対勢力という名の死角

アレンは夜中になってようやく。ベッドから上半身を起こし、まぶたを開いた。

どこに居るのか、何をしていたのか。いつの間に寝てしまったのか、自分のいるこの部屋が一体何なのか。

そして、この部屋の中に居る白衣の彼女達は一体、何者なのかと言っ疑問を順に制止し、口を開いた。

「あんたら……誰だ？」

第一声。無理もない。

アレンは自分の状態を見て、絶句する。上半身裸。

そして、腕に点滴を繋がれ、その横で無音がアレンを眺めている。

「よう、気分はどう？」

「……最悪。何か、頭が痛いし、服脱がされてるし」

アレンの言葉に、無音はキョトンとした様子で、アレンに服を投げ渡す。

「それ、君が自分で脱いだんだよ？ ルイスのベルトのズボンにまで手を掛けてたし、よっぽど強い薬を盛られたみたいだね。まあ、途中で僕が引き受けて解毒したけど、その続きも見てみたかったかもっ……痛い」

扉が開くと同時、無音の頭に握り拳が叩き込まれた。ルイスが真赤な顔で、無音を睨みつけている。

「オイ、これ以上言っなよ。アレンがショック受けるだろ」

「ああ、大丈夫。僕はアレンが君に発情したなんて、言っつもりはないよん」

無音の口調は、挑発的だった。無音に対し、ルイスはもう一撃、

拳を叩き込むも、無音の姿は風景と同化し、消えた。

「……チツ、逃げやがった。あの人間ステルス機が……今度あったら女だろうがなんだろうが、もう一発分殴ってやる」

ルイスの言葉に、アレンはくすくすと笑う。

どうも、その反応は薬を盛られる前とは違い、可愛い。

「可笑しいな、ルイス。どんな因縁があつたの？」

口調まで、丸くなっている。それを察してか、ルイスは苦虫を噛み潰したように、アレンを見た。

「……ナノマシンが精神異常を起こしてるのか？」

「今その話は後にしていただけますか？ アレンさんの生体サンプルは一応、採取できましたので。これを研究室へ送り、解毒剤を開発せねばなりませんので。それまで、彼女の気持ちを揺さぶるのは止めてあげください」

白衣の彼女は、髪を縛り直しながらルイスを制止した。ナノマシンによる精神関与の問題を、アレンに聞かせたくないらしい。

それに対し、ルイスは静かに頷いた。

「で、ルイス……何の用かな？」

アレンが、話を切り出した。丁度いいかもしれない。

「……ああ、簡単な話だ。この吟遊詩人 minstrel の活動は何のために行われてるか。知ってるか？」

ルイスの問いに、アレンは当たり前といった様子で、「秩序維持でしょ？」と返すわけだが、ルイスは首を横に振った。

「さつき正式に、お前の所属部隊が決まった。ソニアの上司、

あの部隊の隊長らしい。よかったな、一気に部下が十六人だ。

詩人のメンバーは少ないからな。部下を持てる奴は百人前後。

入団直後、部下を持ったやつなんてクロア以来だ。ま、あいつは入団二週間で辞めちまったけどな。で、敵の話だ。秩序維持じゃねえ」

机の上の試験簡易封じられた生体サンプルを手に取り、ルイスは部屋を出て行こうとする白衣の研究員の一人に投げ渡した。どう

やら、忘れていく所だったらしい。

彼女達が出て行ったのを確認して、ルイスは言葉を続ける。

「この組織の敵。それはな……お前をその姿にした研究機関。
トランス
変換の連中だ」

脱走注意という名の死角

長かった。このガラス管の中で目を覚まして以来……あのオトコが私を覗き込んで満足げに笑っていた。

私に喋りかけ、作り笑いを浮かべていたが、それも今日までだ。

私は……自由を手に入れる。

「メイシーちゃん、採血させてくれよ」

「嫌です！……アリソンさんは見張り役だって言っただけなのに、何で私がこんな目に……」

二人は、居ない。

この部屋の中は私の居るこのガラス管だけだ。脱走するのであれば、この好機を逃す手はない。

どういうわけか、あのオトコは眠る事もなく私を監視し、恐らく今回が始めて。私から目を離れた。

私の力が十分についていた事に気付いていたのか、あの頃から……監視がとかれることはなかったな。

「……ア……」

それは、俗に言う産声だったのだろう。薬で満たされたガラス管を音もなく砕き、外へ出た私が最初に感じたのはそれだった。気孔を空気が通る感覚。

ガラス管の中とは違う、尋常ではない寒さ。そして、初めてにもかかわらず懐かしみを感じる感覚。

その全てが、新鮮だった。

「……」

言葉が、出てこない。アレだけ、ガラス管の中からのオトコに對して悪態について居たのにもかかわらず。いざ喋ろうとしても

言葉が出てこない。

……とにかく、寒い。　まず、着るものがある。　裸のまま、歩き回れば余計に目立つ。

真紅の瞳で、彼女は周囲を見回した。　白いシルクハットが壁にかけられている。　取り敢えず、被ってみる。　何だ、サイズが大きめだが、変装の一環で、被っておくか。

他は……。　あのオトコが確か、机の横の、シルクハットを掛けていた直ぐ左に壁を叩いたら白衣が出てきたような気がする。

取り敢えず、叩く。　すると壁が開き、数々の衣装が出現した。　適当に、見繕って着る。　道化を模したような仮面がある……。　取り敢えず、つけておくか。

白いコートに、シルクハット。　腰のホルダーには大きなマグナムをセットした。

服のサイズが合わないが、気にも留めずに着る。　そして……。　室内のカメラの電源を落とした。

幸い、ブレーカーの全てはこの部屋にある。　監視カメラの電源を落とせば、私がどこへ逃げたか分からないだろう。　部屋の扉を開くと、二人の声が。　鉢合わせないよう、気配を殺しながら別ルートから研究所の外へ。　そして彼女は、言葉を失った。

逃げる方法が……。　無い。　見渡す限りの、荒野。　そして、地平線の刀まで、町や人工物などは皆無。　……。　そこで、建物の壁に立てかけてあったバイクに目が行った。

こんな荒野。　盗まれる恐れも無かった所為か、鍵はささったまま。

ガソリンは、その横に積み重なっている。　が、どうやらこれは……。　発条式の、独自製作……。　この研究所の製作物だろう。

ガソリンエンジンは燃料が尽きればそれまでだ。　見つかりやすいかもしれないが、発条これ式を貰っていくか……。

彼女はバイクにまたがった。　エンジンを掛ける前に、ハンドルの横にある小さなネジを巻く。

そして、キーを捻り、アクセルを踏んだ。エンジン音など無く、そのバイクは砂を巻き上げ、速度を増しながら研究所を突き放していく。

これで……自由。まず、家に戻るべきか？

私の家……家がある記憶はある。ケド、家は……なんで有るんだ？

家というより事務所だったような気もするが、ガラス管の中で私は生まれたのに、何故そんな記憶が？ いや、それ以前に。

私は何故、言葉を扱える？

「……私は……何者？」

彼女は小さく呟くと、ネジを更に巻いた。アクセルを蹴り飛ばし、一気に加速する。

まずは、事務所に行くのが先決。自由なんだ、私のルーツを探すのも悪くはないか。

*** **

「敵？ どういうこと？ 秩序維持つてのは表向きだけの、殺しの大義名分だったの？」

アレンが驚いた様子で、ルイスに掴みかかった。だが、腕力はどうかやらルイスのほうが上らしい。ルイスは平然とアレンをベッドに押し戻した。

ナノマシンを打ち込んでも、所詮は女の力。同等に鍛えられた男にはかなわないのか。

「いや、そうでもない。排除対象は、変換絡みの奴らのみだ。^{トランス}そして……その背後にあるのが国家機関。というより、セフィロト政府だな。あいつらが資金を流し、他国とは違う人造兵士

を造る研究をさせてる。　でだ、俺らのボス、黒薙童子はそれをよく思っていない」

「俺も同じだ。　そういう類の研究は聞くだけで気分が悪い奴が大体だと思うぞ」

アレンがルイスに対し、ツツコむが、ルイスの表所は固い。

「それでな、言いたくねえが、その研究。　童子が研究初期に手助けをしなければ、現在のレベル前、到達する事ができなかったとあいつは言ってる。　責任感じちまってんだ、ボスの癖に。　だからだ、お前の初任務……明日の任務は童子も同行する予定だったんだが……なくなっちゃったからな」

ルイスは上着のポケットを探ると、一枚の紙切れを取り出した。

それは、見覚えのある“何か”の入ったガラス管の写真。

……クロアの研究室にあった、あのガラス管だ。

「初任務からこれは相当だと思うんだが、クロアがらみだ。　あいつは研究やらせとけば牙を剥かない奴なんだが今回ばかりは。　このガラス管の中の奴が相当危険らしくてな、童子が破壊するらしい。　で、クロアは童子と同等の能力を持ってる。　つまり、アレン。　お前の任務はガラス管の破壊と、その中に居る“何か”を殺すことだ」

写真をアレンに投げ渡し、ルイスはアレンの装備を確認するように。　机の上に避けられていた銃を手に取った。

「……量産型のマグナム。　これじゃ、殺されるのが落ちだ。　……任務を遂行するに当たって、童子から武器が支給されてる。　愛着が無いなら、コイツを使い」

アレンの銃を机に置くと、今度は戸口においてあった鞆から。　大きなマグナムのような銃を取り出し、その横においた。

マグナムにしては、リボルバーが大きすぎる。　だが、その中に込められている弾は、マグナムのそれではなかった。

「戦闘スタイルは主に接近戦。　遠距離にも能力が届き、遠距離から近距離まで、オールマイティと来た。　だが、腕力の無さを補

えと言う意味だとさ。 スペクターの攻略の結果報告を聞いたボス直々。 愛用だった銃らしいからな、壊したら後が怖いぞ」

「んなさ、これから任務で使いますって時に、怖いとか言わないでよ」

アレンの言葉に、ルイスは苦笑した。 そして、それだけを言い終わると部屋を後にした。

「……男が好きになるって、変だな。 いや、いい人だからだ、きつとそうだ」

ルイスが部屋を出たのを確認してから。 アレンは小さく呟いた。

部屋を出たルイスの前に、スペクターが待ち構えたように立ちふさがる。 が、ルイスは直進しようとする。 スペクターは仕方なく、ルイスについていく要領で、横に着く。

「いいの？ 一言“好きだぜ”って言えば彼女、落ちてたのに」

「……お前な。 相手は男だぞ？」

スペクターの言葉に、呆れ混じりにルイスは返す。 だが、スペクターは更に言葉を続けた。

「彼女、もう人格まで女の子だよ。 男だったって記憶があるだけで、君にゾッコンだっ！？」

ルイスは反射的に、スペクターの頭を小突く。 反射的とはいえ、ルイスは手加減をしている。 手加減無しであれば、スペクターのような子供程度。 頭から空き缶のように潰すくらいの事は、造作も無くできる。 だが、スペクターからしてみればバリバリ戦闘員のルイスの一撃は相当堪えたらしい。

頭を抱え、更に。

ザ・キャプチャー

「なんにしろ、僕の攻略に分からない情報はないからね。 君がアレンに惚れてるってことも、割れてるんだよ？ ま、君にそんな度胸が無いのも、分かってたりするけどね」

それだけ言い終わると、拳を振り上げるルイスが自分に向く前にスペクターは逃げるようにして目に付いた部屋へと駆け込んだ。

「……なんだよ、ドイツもコイツも冷やかしてやがって」

脱走注意という名の死角（後書き）

今更ながら。

スペクター君の第一能力

ファーストビリティ

第一とか言ってますが、彼にはこれしか能力は無いです。多分
ザ・キャプチャー
攻略

基本、一目見た相手の身体的な情報を読み取る力であり
その特技、弱点まで分かる。そして、もちろんその攻略方法も
ただ、相手のクレジットカードの番号など、
身体に関係ないものは分からないという一面がある
その気になれば、スリーサイズ、身長体重、好きな相手
更にはコンプレックスまで

全部を一目見ただけで見抜くため

恐ろしい能力といえはある意味恐ろしい能力ではある

帰宅子女という名の死角

研究所を抜け出し、頭の上にあつた太陽も地平線に消えた。日の出ている間はうだるような暑さだったにも関わらず、日が沈んでから。この荒野は殺人的なまでに冷え込んだ。

バイクは依然として、荒れた道を。夜の闇を切り裂くように疾走する。

その銀色のボディが、月明かりを受けてそれを跳ね返す。

コートか何か。上着も持って来るべきだったかもしれない。

時折聞こえる動物の遠吠えや、風の流れる音は、彼女に見えない闇の中の形を正確に伝えていた。

二十メートル先に、高さが十五メートルの崖。そして、その下に更に尖つた岩が転がっているという事ですら。彼女には手に取るように分かる。

このバイクは……発条式だ。そして、スピードを一気に上げれば巻いたネジが一定の速度で走っているとき以上に緩む。

ハンドルの側面についているネジを、つまむと、彼女は力任せにそれを五、六回巻いた。

突如、バイクは金属が軋むような唸り声を上げ、彼女がアクセルを蹴り飛ばすと同時。それは怒り狂ったかのようにスピードを増した。

恐らく、このバイクは二輪駆動。だが、二輪だと崖を下りる際に邪魔だったりする。

ウィリーの体制。前輪を持ち上げ、後輪のみで走行し、次の瞬間。彼女はその姿勢で空を舞った。空中で一回転し、着地先にある尖つた岩を縫うように。

全速力で走り抜ける。

ようやく……町が、見えてきた。

*** **

明日から、本格的に仕事か。それも、相当ハード……。

「……事務所には戻れそうに無いな」

アレンは小さく呟くと、目に付いたクローゼットへと歩み寄った。取り敢えず、開いて中を見る。

……女物しか入っていない辺り、気遣いのつもりなのだろう。

だが、何だか腹が立ってくる。

適当に、ジャケットなど。外行きに向いた服装を見繕って着てみるも、何だかその格好は可愛らしい女の子がボーイッシュな格好をしただけで、仕事着としては様にならない。

そもそも、ジャケットにジーンズの組み合わせが、既にアレンの仕事のイメージから大きく離れていた。

カフインの特徴。黒いコートと、銃。

銃があっても……コートが無い。今の内に調達しておくべきか？

明日の任務は早いような事が、写真の裏に書かれていたし。こ

この一階に服を扱っている店があったはずだ。ただ、あそこの店員とは遭遇したくない。

あの一角での、エンカウント率は相当高い。何せ、店内がそこまで広くないからだ。

そして、あの店員。どうも、こっちの状況を知った上で、俺の反応を楽しんでいる。絶対、遭遇したくはないが……仕方ない。

この際、背に腹は変えられない。

アレンは部屋を出ると直ぐに。エレベーターへ向かい、丁度到着した所を乗り込んだ。すれ違ったサラリーマン風のスーツの男は、俺を二度見たようだ。今は急いでいるんだ、相手してやるつもりは無い。

エレベーターが一階へ到達すると、直ぐに昼間の服屋を探し出し、そこへ向かう。

よし、あの店員は居ない。一直線に、メンズのコーナーへ。

「あら、アレンちゃん。どうしたの、どんなお洋服がご希望？」
そして、遭遇した。^{エンカウント}向こうはこっちに対して、笑顔を向けているが、恐らく。“私”はとんでもなく失礼な表情を向けているに違いない。

だが、彼女はクロアよろしく、その笑顔を崩す気配が無い。それ以上に、アレンはその彼女が手に持っている衣装を見た。血の気が失せていくのが分かる。

「……なんで、メイド服？」

「え？ いいじゃない」

いやー……よくないって。明らかに、その手に持ったそれを“私”に着せるつもりだろ？ 俺は絶対嫌だぞ？

「で、どうしたの？ ……アレンちゃんの準備室にはお洋服、届けたと思っただけ……あ、成程ね。彼氏出来たの？ おめでとう！」

……いえ、違いますがな。

「相手は誰？ 無音君？ それとも、ルイスちゃん？」

何ゆえ、ルイスはちゃん付けなのでしょう？ つーか、先走り過ぎだつて、アンタ。

「いや、違いますって。俺が着る服ですから」

「それって、可愛いセーラー服とか似合いそうじゃない？」

正直スルー。何だ、俺、この店員が苦手だ。

何で、こんなテンション高いんだよ？ 可笑しいだろ、俺のこと舐め回すような眼で見てるし。正直、少し怖い……。

「……黒いコートって無いですか？ できれば、サイズ大きめでゆったりしたやつ……」

「あるけど、私のお勧めはこれかしら」

店員端数に棚の下に積まれていた箱の一つを手に取り、中身を取り出した。メイド服とか、ゴスロリ服が出てくると思ったが、案外マトモな黒いコート……。

やられるがままに、更衣室へ詰め込まれ、取り敢えず。 渡されたコートを着てみる。

「……何だ？」

思わず、そんな言葉が漏れる。 いつも着ていたのとはずいぶん違い、妙にぴっちりしているというか、何と言うか。

そのくせ、胸周りがきつくない辺り。 絶対あの店員、俺の情報をどっから仕入れている。

「……もう少し、大きいのは無いですか？」

平然と。 更衣室のカーテン払いのけ、店員に問う。 だが、彼女は首を横に振った。

「無いわ。 貴女に似合わないから」

オイコラ、どういう意味だ。

「だって、大きくしちゃうと折角スタイルいいのに。 分かんなくなっちゃうじゃない」

……左様ですか。

デジャヴという名の死角

いつもバイクを止めていたガレージに、バイクを乗り入れ、シャッターを下ろす。

確か、私の事務所はここだったと思う。扉の鍵穴の多さは、よく覚えているのだが。

どういうわけだろう、妙に屋内が騒がしい。私以外、誰かがこの事務所にいただろうか？ 私が事務所にいたときは、確か一人だけだったような気がした。

躊躇いつつ、私は事務所のインターホンに指を伸ばす。

>>ピンポン<<

「はい」

金髪の女が出てきた。騒がしかった辺り、もう一人居る。

「……貴女達は一体何をしているの？」

口を突いて、その言葉が吐き出された。私の居ない間に、誰かが住み着いていた。

それも、見たことの無い連中……？

「どこかで、会ったっけ？」

向こうの問いに、頭が重たくなる。何だろう、過去に、どこかで会っている様な気がする。けれど、私にその記憶などない。

何故だ？ 面識の無い相手なのに……デジャヴ？ いや、本当に見た事どころか会った事すらない人間を、覚えている？

だとすれば、この女は一体誰だ？ ……“約束だよ”“大人になったらまた会おうね”“ボク、君のことが好きだよ”断片的な記憶が、頭の中に浮かぶ。

だがそれは、自分の経験などではない。私はここ何年もの間、あのガラス管の中に居た。なのに、何故？

「……ユリア？」

何故、名前を知っている？ 何故だ？

「あの……どちら様でしょうか？」

向こうは、私のことを知らない。やはりそれは……当たり前だ。会ったことが無い人間なのだから。

*** **

就寝が深夜。 ユリアに電話を掛けると、「お客さんが来たよ」という報告が。今日は帰れないと返すと、何だか気分良く「分かった」と返してくれた辺り。何だろっ、何か企んでる。それも、ろくでもないことを企んでいる。

「あー、緊張するな」

俺らしくない。 昨日は結局、あの店員が俺に次々と服を進めてきた結果、営業時間を二時間も大きくオーバーして、ようやく逃がしてもらえた。

結果、十時頃にコートを探し終えたにも関わらず。 寝れたのはそこから三時間後。 少し前までなら、シャワーを浴びる必要も感じなかったのだが。 何だか最近の俺は、鼻が利くらしい。

自分の体臭に敏感とでも言うべきか、女になった結果なのか。

シャワーを浴びずには居られなかった。

そして今現在、明け方の午前八時。 目の下に隈をつけたまま童子の待っている最上階へ向かうため、仕事着の黒コートに腕を通した所、ソニアの部下の一人。 ジニーに捕まり、「それじゃ駄目だよ」と、化粧をされ、遊ばれて、ようやくここまでたどり着いた訳だが。

何だ、欠伸が……。

童子の指定した個室の前で、とても気まずく立って居る所だ。

中からは、洞窟を吹き抜ける風のような音が規則正しく聞こえてくるだけで。人の居る気配がないのだ。

もしかしたら、早く来てしまっているかもしれない。兎に角、部屋に入りづらい。

「……どうした？ そんなところで突っ立って……あ、そうか。君、アレンか」

突然、背後から聞こえる声にアレンは飛び上がる。そこにいたのは、ずいぶんと華奢な背格好の、優男……。見るからに、弱そうと言うべきか。

このビルは武闘派連中が多いと聞いていたのだが……昨日エレベーターですれ違ったあのスーツの男以上に弱そうだ。というより、今の俺でも負ける気がしない。

「……そうだけど」
「ンアツハツハ、可愛いな。さて、人待ちだろ？ ほら、入った入った」

言われるがまま。彼は躊躇なくその部屋のノブに手を掛け、扉を開く。室内は、なにやら応接室のような雰囲気だ。

ソファがあり、テーブルがあり。そして、小さなデスクが一つ。恐らく、お偉いさん『黒薙童子』の仕事用の個室とでも言った所か。俺はその辺、名称は疎いからな。何て言うんだろ？

「ほら、座って座って」

彼は気さくに、アレンをソファに投げ込んだ。だが、アレンは立ち上がり口を開く。

「俺は黒薙童子って奴に“仕事”で呼ばれてきたんだ、座って待ってるつもりはねえ」

アレンの言葉に、彼は苦笑する。まるで、アレンが簡単な問題を間違えて困っているように見えたのだろう。彼はそれに対し、アレンの腰に手を伸ばす。

「や……ちょっと……」

アレンの声に、彼は少し気まずそうな表情を向けるも、直ぐに気にしていないかのように。その手はベルトをなぞる。

「いや、君の身体には興味は無いよ。俺はもう死んでるからさ、色欲は無いんだ」

ホルダーに手を掛けると、彼はカバーをはずし、その中を手にとった。昨日、ルイスに渡された支給銃。

「……俺の愛用品でね、スラッグの入れてる向きが逆だ。これだと、引き金引いても弾は出ないぞ。まあ、この銃の弾は前後分かりにくいからな。無理もないか」

殆ど円柱形の薬莢を取り出すと、彼は慣れた手つきでそれを入れ替え、アレンに投げ渡した。

「にしても……やっぱ君可愛いや。俺の部下やらない？ あ、もう俺の部下か」

この男の言動が今一良く分からない。寝起きの頭に、それも寝不足でキチンと稼動していない脳に、そんな一気に情報を入れられるわけがないだろ。

「ま、からかうのはこの辺にして。……俺が、ここのボス。……ミンストレルと言っより、吟遊詩人ボスの黒薙童子だ。くろなきどうじヨロシクな、アレンちゃん」

言葉の直後、彼が吐き出した息は……まるで洞窟を抜ける風のような。虚な音がした。

友人関係と言う名の死角

「さて、談笑はこの辺にして。 散々、支給品を君に渡して来た訳だけど、今回の任務の事前支給はこれが最後かな」

童子は自分のズボンのポケットを探り、なにやらご大層な、プラスチックケースに収められた三錠の錠剤をアレンに手渡し、反応を待った。

だが、アレンからすればこの薬が一体どんな効果を発揮するのか。持病に関しても全く、心当たりが無い。

「もしかして……ドーピング？」

童子は首を横に振る。

「いいや、君が元に戻るための薬だ。 俺が調合したんだけど……どうやら、一錠で五分が良い所らしいんだよね。 で、一度使っちゃうと次からその薬の効果は無くなる。 で、別種の薬を三つだけ、作ってたってわけさ」

「何で三錠だけ？ と言うより、俺の姿を完全に戻す事は……」

「俺には無理」

アレンの気持ちなど考えず、至極あつさりと、その審判は下された。

童子はデスクの上のペンを手に取ると、クルクルと手の平の上で回し、ペン立に突き刺した。

「戦力的には、君を元に戻したい」

「だったら……」

半ば怒鳴るアレンに対し、童子はアレンの唇に、人差し指を突きつけた。 恐らく“静かにしろ”と言う意味だろう。

「無理を言わないでほしい。 俺が人類の誕生以来の、アインシユタインを超える天才だと言っても……君の姿を元に戻すのは、俺には無理だ。 “不可能”……これを、ひっくり返せるのは漫画やアニメ……それと、ただのくだらない恋愛ラブコメの中くらいだ。

君は、コーヒー？ 紅茶？ ミルクは？」

「……知らない」

「そう」とだけ相槌を打つと、童子はコーヒーメーカーからマグカップにコーヒーを移すと、その中に砂糖を流し込み、ミルクを入れた。

コーヒーメーカーの横に指してあったマドラーを手に取り、コーヒーとミルクを混ぜる。

「君の体内で、これと似たような現象が起きてる。俺には、それを分離する力はないし、分離してもメリットは無い」

コーヒーを一口飲むと、彼は話を続ける。

「これから襲撃を掛ける、クロアなら何か怪しげな方法を知ってる可能性も否定できなくはないが、クロアのことだ“君を元に戻して、ボクに何のメリットがある？”とでも聞いてくるだろうな。」

それで、君はその身体を差し出すと……。で、君は一生ガラス管の中で暮らすわけだ。今回、破壊するターゲットみたいに」

童子は静かに、コーヒーをテーブルに置くと、アレンの向かいに腰掛けた。

「ま、それじゃ戻っても意味は無い。俺が言いたいのは、アレン。君の体からナノマシンを除去すれば、君は死ぬ。もう、体の機能はナノマシンに依存しきっているんだ、当然と言えば当然だな。そして、君の体内のナノマシン“トイクレクト”は独自に進化する。恐らく、俺が渡したその錠剤。有効期限は、よくて十日ってトコだろうな。それまで恐らくは、ナノマシンの進化を先回りさせ、抗体を先駆け取得できないはずだ」

「そんな……」

アレンの言葉に、童子はついに、呆れたような顔を向けた。そう、まるで戻れない原因は、アレンにあるかの方な様子である。

「そして、最後の障害……それは、君自身だよ、アレンちゃん」
何となく、分かつてはいた。副作用がないと思い、ユリアが打ち込んだナノマシンは……他のナノマシンや、それと類似する体細

胞組織を破壊する。つまり、ナノマシンとの適合と、それに耐えるだけの体が必要なのだ。

確か、あの添付されてきた書類に、書かれていた一文だったはずだ。

「君の知る、君の体の、類稀なる耐久力とかじゃない。君自身、もう精神的に女の子だから。戻しても、生活に支障が出るだろうし、人の気持ちに関してはね。俺は関与したくなければ、関与する術を持ってない。ま、これから、関与するつもりはないし、自分に嘘を吐かせるなんて、なおさら嫌だ」

言いたい事を言い終えたのか。ソファから立ち上がると、彼は机の引き出しから、あのダイアルのついた鍵を取り出すと、ダイアルのナンバーを合わせ始める。

「俺は……」

アレンが話し出すのを聞いてか、彼の手が少し止まった。面倒くさそうに、彼はアレンに視線をやる。

「どうした、受け入れられないか？ 当然だ、“男のときの記憶”を持つてるんだ、余計にな」

「そうじゃない、俺は……」

アレンの言葉を遮るように、彼は再び口を開く。

「その辺の一般人捕まえて、違う性別の人間の性別の記憶を突っ込めば、混乱しても否応無しにでもそっちに順応する。……あまり言いたくは無いが、慣れる。俺と身体を取り替える事もできないが、俺の身体はもう死んでる。君に、不老不死なんて重い荷を背負わせるのは気が引けるだろ」

「そうじゃない。俺は、アレンだ。女になったつもりは、更々無い」

アレンの言葉を聞き、童子は鍵をテーブルに置いた。

「これ以上話すと、計画に狂いが出るから喋ってられないんだが……可愛い部下のためだ。今日一日潰すつもりで話し相手になつてやるよ。で、どうした？」

止めるよ、優しくするな。俺に、優しくするなよ、お前……。

「何で、俺を……」

「引き入れたかつて？ 簡単だ、寂しがってたから」

止める、それ以上言うな。頼むから、止めてくれ！

「君にはユリアと言う幼馴染が居ても、彼女とはつい最近連絡が取れた所だろ？ 彼女に連絡つけた奴、誰か知ってるか？ 彼女に殺しの依頼を提示した奴、誰か知ってるか？」

……。

「俺だよ。スカウト以降、妙に人脈が増えたる？ 仕事以外で、仲間が出来た」

もう……止めて。

「言わないでよ……」

「嫌だな。ここまで来れば、君が泣くまで止めない」

彼は、意地悪だ。人の気持ちを知った上で、決るように傷口に薬を塗っていく。

「君が、好きな人が居る事だって知ってるんだ。ま、居ると言う情報だけで、誰かは知らないけど。……あの服屋、俺の行きつけでね。それだから、このビルの中で店開かないかって提案したんだ。場所代タダで。店員の彼女とも、仲の良い友人だ。無音に関しても、俺の一番仲の良い部下の一人でね。鼻屑しないのが俺のルールなんだが、無効がどう思ってるかは知らないが、俺は親友だと思ってる。アレ、君も同じだ。部下である以前に、仲がよくないと嫌だからな。ま、俺はただの理想主義のお子様なんだよ」

アレは、頬を伝う涙を必死になって拭う。が、どうしてだろう、初めてかもしれない。

俺ってこんな……涙脆かったわけ？

「俺に……優しくするなよ……」

「嫌だね。……さて、泣いちゃったし。落ち着いたら、任務開始と行こうか」

そういうと、童子はハンカチを引き出しから取り出すと、アレンに手渡した。

「……馬鹿いうなよ、友人関係と仕事は別物だ。俺はいつでも行ける」

ハンカチを突き返すと直後。アレンは、鋭い視線で、童子を威圧する。

そうだ、いつもの俺だ。

「……へえ、立ち直りが早いんだ。視線がまるでナイフみたいに痛い……確かに、相当な実力者らしいね。じゃ、始めようか」
鍵をテーブルから拾い上げると、童子は部屋の戸にそれを差し込んだ。そして、捻る。

ガチャリ

前も聞いた音。そして、彼は躊躇なく。そのノブに手を掛けた。

「や、いらっしやい。散らかってて悪いね」

それはまるで、二人が来る事を知っていたかのように、扉の向こうで待ち構えていた。

「れ？ アレンちゃん、どうしたんだい？ 童子なんかと一緒にボクに、元の姿に戻る方法を聞きにきたの？」

それは相変わらず笑顔を向け、禍々しく息苦しい空気を放っている。

「童子に無理なら、ボクには到底無理だよ」

そう、クロア・ディナイアルが、そこに居た。

脱走直後と言う名の死角

彼はガラス片の散らばった床の上に立ち、二人を見据える。

「……そうだな。童子、ボクを殺してくれ」

クロアの言葉。それに対し、童子は首を横に振った。

「何でだよ？ 君なら殺せるだろ？ ボクを殺せるだろ？ 『貴様に殺せぬはずが無い！』人類滅亡なんて朝飯前だろ？ 一人殺すくらい、『息を吸うように！』鼻くそほじりながらもやるような奴じゃないか！」

クロアはとち狂ったかのように。柄でもなく、大声をあげた。

「……勘弁してくれ、俺はもう反抗期の餓鬼じゃないんだ。お前には、不死鳥から死んではいけないという命令が下されてる。

悪魔とか、魔物とか。そういう類には、お前を殺すことが出来なければ、命令にそむく事もできない。……知ってるだろ？」

童子は呆れたように、クロアに返す。だが、クロアは諦め切れ
ていないらしい。何と言うか、雰囲気シルクハットが……？ あれ？

「ねえ、帽子はどうしたの？」

「ああ、持ってたかっちゃった。で、童子、なんでも良い……」

次の瞬間。彼の狂気は、笑い声を上げる。

「早く『殺せ！』殺してくれよ！ ボクを！ 『俺を殺せ！』殺せるだろ？」

ついに彼の限界が来た。無数のナイフが、二人を空中から包囲する。だが、童子はそれに対し、顔色一つ変えない。

次の瞬間。浮かんでいたナイフが二人を襲う！

「……俺から離れるなよ」

それだけ言うと、童子は手の平の上に黒い光球を浮かべ、それを握り締め、手の平を開く。すると、黒い光が球状に広がり、ナ

イフをはじき落とす！

だが、クロアはまだノーダメージ。彼本体が、その手に真紅の剣を握り、童子に切り込んだ。間に合わない！　が、それをアレ
ンが足で蹴り止めた。

劈くような金属音が、辺りに響く。

驚いたように、童子は口を開いた。

「……ただのゴム底だろ？　それ」

「ああ、ゴム底。ただ、能力で強化してる」

しかし、それは長くは持たなかった。アレンの足がはじかれ、
クロアがもう一度それを振りかざすのと同じタイミングで。童子
は袖から小さなナイフを取り出すと、それを平然と受け止める！

「……それ、アリソンの使ってた剣だろ？　何でお前が持つてる
んだ？」

「うーん、創った！」

一瞬でも気を抜けば、恐らくはミンチ。クロアの単調な剣の一
振りは、恐ろしく早く、素早さと比例してか。その攻撃力は凄ま
じい。

さつき剣を蹴った足、まだ痺れが抜けない。

そうこうしている内に、クロアの一撃が同時の防御線を潜り抜
け、アレんに掠る。アレンも負けじと銃で対抗するが、彼は笑顔
のまま。

「スラッグ？」

パン。そんな拍子抜けするような音と共に、彼の合掌一回で。
スラッグはただのくず鉄と化した。かつて無い、圧倒的な力の
差。

ここまで来ると、こいつが人間ではない。戦闘マシンとして
作られたと言うのも納得できるほどだ。ただ、このヘラヘラして
余裕以外に何も無い態度が、何だか気に喰わない。

「そう睨むなよ、アレンちゃん。ボクだって、ただ痛いのは嫌
なんだ。死ねるならともかく、痛いだけはね」

アレンの連続射撃を、クロアは次々と拍手をするかのように。

八工を叩き潰すかのように叩き潰していく。その間に、童子の蹴りがクロアの顎にヒットした。

だが、クロアはその一撃に身を任せ、浮かび上がると空を舞った。天井を何歩か歩き、回転しながら床に着地する。

「アレン、あの被検体の入ったガラス管を探せ。この研究所の奴は、クロア以外は雑魚だ。お前一人で行けるだろ？」

「残念だったね、多分キミたちの言う彼女は……」

童子の一突きをクロアが蹴りで打ち上げ、童子の手にあったナイフを天井に突き刺した。それと童子、クロアは再び、どこからとも無くダガーナイフを取り出し、童子へと斬りかかる！

「逃げた！」

金属同士の衝突音。それと同時に、クロアはそれを言い放った。

「……逃げた？」

童子の問いに対し笑顔のまま、彼はその手に握った剣を振るう。それに対し、同時はついにそれを腕で……手の甲で受け止めた。彼の皮膚が割れると、その中から銀白色の金属板が露になった。

「ああ、逃げられちゃった」

面白くないように、クロアはダガーを懷に戻す。童子もそれに

従い、天井のナイフを手を触れることもなく。サイコキネシス念動力を使ったか

のように引き抜くと、ポケットの中に放り込んだ。

「どういうことだ？」

「どうもこうも、そういうこと。今更、襲撃命令に従って誰か襲ってるんじゃないかな？ 帰巢本能で、アレンちゃん。君の事務所に戻ると思うし、多分昨日の夜中には到着してると思うよ。もう、そこには居ないと思うけど」

クロアは首の後ろを掻いた。それに対し、童子は絶句する。

「どういうことだ、この研究所は……！ クソ、昨日既に逃げて

たのか。 いや、夜中つてのはどういうことだ？」

「昨日の昼間に、逃げられちゃってね。 徒歩とかだったらまだ待ちまでは到着して無いだろうし、簡単につかまると思ったんだけど。 ボクとした事が、バイクを表に出しっぱなしでさ。 それに乗って逃げちゃったみたいなんだよね。 彼女」

クロアは研究室の扉を外とつなげると、見渡す限り。 地平線を二人に見せる。

「ここから、大体距離にしてキミタチの居る町とは二万キロくらい離れてるわけなんだけど。 ガソリン車だったら搜索は楽だったんだ。 ボクの発条式のバイクに乗っていかれてね、ボクとしても中々困ってる。 あれは、人間の手に渡してはいけない永久機関が仕込まれているから。 アレを手にしたら、あのセフィロトの政府^{バガ}は直ぐに、隣国に戦争を仕掛けるだろうね」

呆れた様子で、クロアは扉を閉じる。

「たった一台のバイクが、人間の歴史を大きく変えちゃうんだ。 …… 最も、君もその気になれば永久機関程度のものは直ぐに作れるんだろうけど」

クロアの言葉が終わるか否か。 そのタイミングで、童子は直ぐに行動を始めていた。

「アレン、お前はその検体を探し出し、始末しろ！ 俺は相手に感づかれないよう、少人数で搜索チームを結成し、その検体の確保及び抹消に向かう！」

扉に鍵を突き刺し、童子は捻る。 そして、テーブルの上のコーヒーを飲み干すと、足早に。 その部屋を出ようとするが、それをクロアが制した。

「なに勝手な事言ってるの？ アレは僕の所有物だ、君に壊されてたまるもんか」

再び懐からダガーを取り出すと、童子に対し、クロアが構える。今までにない、吐き気を催すような空気が辺りを取り巻き、アレンは思わずその場でうずくまった。

童子は仕方ないと言う様子で、手の平をクロアに向けると、次の瞬間。クロアの肢体が、無造作に弾き飛ばされ、扉と繋がっていた研究室の壁に、彼をたたきつけた。

「安心しろ、ただのサイコネシスだ。悪いが、死人が出るかもしれない。これも不死鳥の命令でな、放つては置けない。」

「チームを組むのは止めだ、これなら俺一人で探した方が早い」戸から出るのを諦めたのか。童子は窓を開けると、そこから飛び降りた。

「……アイツ！ 空から探すつもりか！」

それと同じく。クロアも窓から飛び降りる。

ここ、二階とかそんなレベルじゃないぞ？ 高さ二百メートル級のビルの最上階の窓から飛び降りる二人は、もはや人間ではない。アレンが窓の外に目をやると、二人の姿はもう消えていた。

有効視野という名の死角

ビルから飛び降りた所までは良い。空から探すつもりだったが、肝心な事を忘れていた。

「そっぴゃあ、あの検体の見た目知らねえや……どんな格好だろ……」

童子はビルから落ちながら、今までの情報を凄まじい勢いで整理していた。そして、彼は地面スレスレまで落ちると直ぐに。コネシス動力で身体を浮かし、急上昇する。念

今までの会話をひっくり返ると、

「シルクハットを被ったクロアみたいな服装の、怪しげな奴……だな。彼女と言っていた辺り、女で恐らくアレンと大して変わらない格好つてところか」

アレンとクロアの会話や、あの研究室にある衣装を考えると。

恐らく、そんな姿だ。若干の差異はあるかもしれないが、大まかな人物像が分かっただけでも十分だ。

「やあ、童子。早く見つけないと、ボクが先につれて帰っちゃうよ?」

童子の視界に、クロアが突如飛び込んでくる。真上から、視野を覆うように。

彼は彼で、背から白い翼を生やし、空を飛んでいる。全く、ずいぶん前からその奇妙な能力は知っていたが……そんなことも出来るのか。

「どうしたんだい? ボクの翼が珍しいのかな? ……これ、実はね」

クロアは楽しげに、童子に喋りかけてくる。

「あの検体の力の一部なんだ。彼女、中々強くてさ。ガラス管越しだって言うのに、ボクの魔力をバカみたいに喰っちゃったもんだから。多分、相当強いよ?」

クロアはアクロバット飛行を繰り返し、十分楽しんだのか。童子の背後へ突き抜けるように直進し、ビルの陰へと姿を消した。

「……クロアの魔力を？」

まずいな。非常に、困った事になった。

*** **

まず、俺は第一にユリアの安全を確かめるべきだろう。

『……はい？』

「ユリア？」

アレンは携帯電話で、事務所に電話を掛けた。この声は、ユリ

アの声だ。

「……昨日、誰か事務所に来なかったか？」

アレンの問いに、数秒間。ユリアが沈黙する。

『……来たよ』

「どんな奴だ？」

アレンの問いに対し、ユリアは無反応。そして次の瞬間。

ユリアが恐らく、受話器から離れた。受話器を置いたような音

と、その直後。

『もしもし？』

聞き覚えのある声。ああ、そうだった。

「……なんだ、ソニアか」

『“なんだ”とは何ですかアデル』

……はい？ 一体何事だろうか？ 何か、あったわけ？

……そうか、そういえば。

「ごめんなさい、お母さん」

そういうことだった。あの事務所を買った家族の、母親役だったわけ。

にしても、ずいぶん様になってるな。同じ二十代だったのに、何でそんな俺と年の差を感じさせる役が務まるのやら。不思議だ。

「つーか、今の俺の名前はアデルなのな……。どうやって決めたんだか、ぜひと教えてもらいたい所だが、今はそんな暇は無い。」

「ところで、お母さん。昨日、誰かそっちに行かなかった？ 私は仕事でビルに泊まってたから、らしいって事しか聞いてないんだけど」

「そうだな。白髪で、俺と同じ顔……。とても言えば一発で分かるかもしれないが。参ったな、“誰か”って言っちゃったし、双子じゃ済ませない。」

「なんにしろ、無線通信だ。盗聴だの、傍受だのがある以上、直接特徴を言うのはまずいか。」

『来たわよ、可愛いお人形さん。あれ、アデルのお土産？ 最近出張仕事ばかりだったものね。あるとしたら、貴女しか居ないじゃない？』

「……サンキュ、ソニア。」

「うん、そうだよ。可愛いでしょ？ 髪の毛白いの、私の趣味で。私ソツクリに造って貰ったんだ。つまり、私は可愛いのだ」

「うん、馬鹿みたいだ。小芝居とはいえ、馬鹿だ。」

「盗聴を考えて……の小芝居だったが、盗聴だろうがなんだろうが。聞いていて欲しくない。」

「電話越しにソニアの笑い声が聞こえる。ああ、やっぱりそういう反応か。」

『で、そうね。確かに、言われてみればアデルソツクリかも。で、どうしたの？ 欠陥でも見つかった？』

「……うん、そうなんだ。今からそっちに行くよ、近くに居るから。じゃあね」

「アレンはすぐさま、電話を切った。」

「間違いない、アレはまだ事務所に居る。そして、ユリアとソニアと、そこに居る。」

「だが、危害は加えていないらしいな。あの様子だと、なんだ？」

俺の知り合いと勘違いしてる可能性がある。

「……早いトコ、行くべきだな。目立つから絶対嫌だったけど、この際仕方ないか」

実を言うと、俺の能力は短時間とはいえ、飛行可能だ。ただ、それ専用の力ではないために、そこまでの持続時間は無いわけだが、アレンはすぐさま、屋上へ向かう。ここは最上階……バイクで地上から向かうより、空から飛んで向かった方が圧倒的に早い。

アレンは研究室へと繋がっている部屋の扉を一度閉めると、再び開く。案の定、そこはビルの廊下。

よかった、閉じ込められたわけではなかったらしい。

そして、その素早さで廊下を駆け抜け、非常用階段へ。そこから一気に、屋上まで駆け上がる！

「……曇天か、助かったな。暗いし、そこまで目立たないか。マイナーチェンジ【ブラックウィング黒ノ翼】」

アレンの言葉の直後。彼の足元が陥没したかと思うと、彼の背から。

どす黒い金属光沢を放つ翼が出現した。カラスのような、それは中々美しい。

あっちが北だから……事務所は……。

「こっちか」

アレンはその背の翼を力強く羽ばたかせると、空を舞った。

*** ** *

「ねえ、アグネちゃん。紅茶はどう？」

ユリアは事務所のソファに腰掛ける少女に対し、問いかける。だが、彼女は黙ってソニアと対戦中のチェスのボードに目を向けたまま。顔を横に振る。

「……アグネちゃん、そこ待って！」

どうやら、アグネと呼ばれた少女は、後数手でチャックメイトを決める所だったらしい。ソニアが待つてくれるよう頼むと、たった今動かしたばかりの黒のナイトを退いた。

「……ねえ、ソニアさん」

「お母さんと呼びなさい、今この事務所ではそういう役で居ないといけないんだから」

ユリアの言葉に対し、ソニアは小さな声でユリアにそう言い返す。どうやら、その家族構成は母がソニア。娘二人。姉がユリアで、妹がアデル。そして、今日の前に居る白髪の少女……アグネは親戚と言う構図らしいのだが。どう見ても、この三人は家族には見えなかった。

「だったら、もう少し家族って雰囲気まで偽装できる人を呼ぶべきではないですか？　ボクにはどうも、荷が重すぎちゃって……」

「そうなのよね。ケド、これでいいらしいよ。電話越しの盗聴相手をかく乱させるだけらしいから。そこまで大声で無かったら盗聴器しかけられてても反応しないし」

ソニアの言葉の直後、インターホンが鳴った。

客……ではないな。このタイミングだとアレンがこの少女の情報を持つてここに来たと見るのが妥当か。

「ユリア、出てくれない？　多分、アデルだと思うから。アグネちゃんはいいわ、このままで。私との対戦が途中でしょ？」

ソニアはそういうと、遠慮なく黒のナイトが陣取る予定だった場所を狙い、白のポーンを配置した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906y/>

大きな銃に小さな手

2011年12月15日10時49分発行